

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年六月二十五日 印刷
昭和四十一年七月一日発行
(毎月一日発行)
(第一〇号)



No. 10

特集・路郎百句

七月号

川 柳 塔 社 主 催

路 郎 忌 川 柳 大 会

日 時 昭 和 41 年 7 月 10 日 (日) 午 前 10 時 開 催

会 場 慶 沢 園 (旧 住 友 別 邸)

大 阪 市 天 王 寺 公 園 内 美 術 館 横

電 話 大 阪 115・0 7 7 1 番 (公 園 事 務 所 内)

★梅田駅から環状線や地下鉄でお越しの方は
天王寺駅下車・会場はすぐわかります。目標は美術館。

会 費 3 0 0 円 (記 念 品 贈 呈)

★才一部「一周年祭典」

(同会場において
午 前 10 時)

― 休 憩 ― (30 分)

★才二部「川柳大会」

(正午～3 時)

司 会

(第一・二部とも)

西 尾

挨 拶

中 島 生 々 庵 葉

同

麻 生 了 一 ト

追憶談

堀 口 塊 人 他

兼 題

「一徹」 近 江 砂 人

「天井」

梶 元 紋 太 郎

「雲」

川 上 三 太 郎

「髭」

麻 生 葦 乃

席 題

(兼題締切・六月二十日本社着便まで)

(四題・当日12時30分締切厳守)

(兼・席題とも二句以内)

★投句だけされる方は切手五十円封入

★才三部「野外パーティー」(模擬店等)

(同会場庭園において)

会 費 八 百 円

一 投 句 先

大 阪 市 南 区 鰻 谷 仲 町 之 2 0

川 柳 塔 社 内 路 郎 忌 川 柳 大 会 係 宛

今月のことば

◎私達の中学時代には優秀な生徒は五年生を卒業せなくても四年修了で高等学校なり兵学校に受験を許されパスする人も相当にいた。そうした人達が一時優越感にひたることは勿論想像に難くない。

◎然しその事が即、長い人生行路の成功者ばかりであったとはあながちにいいにくい。

◎特種な世界をのぞけば、たとえそれが自分だけの功利的生き方でなくとも、一歩一歩、その歩いた一歩分だけに従って眺望が開けて来るのであって、てっとり早く社会全般の千里を照らす光明というものを期待してはなら

中島生々庵

ぬ。

◎ゼット機や超特急で成功を試みるのではなく、一粒一粒の無名の微力が忍耐強く長い時間集積されてこそ、民族や国家も大を築いてゆくのであらねばならぬと思うからである。

◎伝教大師はいみじくも「一隅を照らすものはこれすなわち国宝なり」と説破する。

◎わたくし達の「川柳塔」も、街の片すみに貧家の一灯を献じて、いささかでも寄与することがあればと、こいねがうものである。

◎初めての路郎忌を迎えて、私は特にこの感が深い。



川柳塔 七月号

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば

.....

中島生々庵.....(1)

三百六十五日

.....

中島生々庵.....(4)

川柳塔

.....(同人作品).....

中島生々庵選.....(6)

・特集・

路郎百句

.....

麻生葭乃.....(21)

旅人としての

路郎先生

.....

北川春巢.....(29)

川柳初篇研究

.....(三十七).....

.....(34)

前田喜代人・岡崎重義・清
川端柳風・故高須啞三味・丸
博美・藤井和雄・
十府・岡田甫・

秀句鑑賞

.....(前月号から).....

後藤梅志.....(42)

うちの猫(近詠)

.....

麻生葭乃.....(33)

川柳塔社同人名簿

雅号ぶつちやけばなし

近作柳樽

大萬川柳「味」入選発表

金泥集

作句教室

★柳界展望

★本社六月句会

★各地柳壇

「表紙」

一路集「雨」

「母校」

西村句楽坊 (50)

大森娛句楽 (53)

菊沢小松園選 (36)

清水白柳選 (52)

麻生葭乃選 (33)

清水白柳 (46)

(薰風) (54)

(庸佑) (56)

(文秋) (59)

久家代仕男選 (44)

藤井明朗選 (44)

小西無鬼選 (45)

★編集後記

白柳・一三夫 (64)



ご入院当時の先生

三百六十五日 中島生々庵

麻生路郎先生とお別れしてから丁度一年という歳月が流れた。この三百六十五日、朝に夕に、雨につけ風につけ思い出はつきぬ。そしてその思い出は、昔からいわれられている通り、別れてぞ知る言葉、平凡ではあるが、愛惜、悔悟、追慕といった言葉が次から次に続いて、それがしきりに寂しさにつながり、悲しさを誘うて来る。

「ふるくとも僕には仁義礼智信」の句、これは先生が、おん自ら先生の全人格をお示しになり、且、われわれ門下生共が進むべき道しるべとして、永遠に残されたお訓しである。私は拝受しておる。しかも先生は、ご生涯を通じて「人間は仕事に打ち込むことによって修養されるのだ。そして川柳はその人間陶冶の道場であるのである」と声を大にして叱咤ご指導賜ったのである。この一貫したご信念のもとに七十八年のご生涯、最後までその主張を筆に、言葉に、行動に移されて、倦むことを知らずという態度であらせられた。かくして先生のご生涯は、何もかも焼きつくさずにはおかぬ文字通り火の玉のような熱情と、絶対に権者に屈することなくわが道を往く大信念に終始せられたことは今更らの如く深い感銘に打たれるのである。こうしたお人柄の他の一面には、飄々乎として身辺をかざることなく接するものもろの人の人に対しては実に涙もろく、幾多弱者のために示された温情の深かさも知る人ぞ知る、限らないも

のであった。

私はさき頃、先生の思い出にふけっているさなかに、はからずも七八年前に読んだ小説の一節を想起し、探し出して読み返えてみた。それは武者小路実篤氏の著の「真理先生」という小説である。

僕は先生に或る時、「先生はなぜ金を持たないのです」と聞いた。「持てばすぐなくなる。なくなつてから又くれるの言い難い。なぜ金がそんなに早くなくなるか、説明するのがいやだから、なければさっぱりする。無尽蔵にあれば別だが、しかし金があると慾望も強くなるし、落ちつかなくなるのも事実だ。それ以上いやな奴が近づいて来るのも事実だ。金なしに生活するやうになつた。その味が忘れられないのだ。勿論、金があればいいと思う時もないとは言へない。しかしそれは他の人に相談してどうにかしてやらふ。出来ないことは仕方がない。僕はどっちにしろ金には縁のない人間だよ。金で他人に奉仕することは僕には出来ない。金がなくなつて、僕は僕の心のままに生きられるやうになつた」

「今時に金がなくなつて生きられる人は先生の他にはないでせう」と言つたら

「實際僕は運がよすぎる人間だ。ありがたいと思つてゐる

る。僕のやうな我儘な人間が、皆に愛されるということは実にはありがたいことと思つてゐる。僕ほど仕合せ者はないと思ふ。」

真理先生は、涙ぐみながらさう言つた。聞いている僕が目も涙ぐんで来、いい人だと思つた。

以上が原文のままの一節であるが、最後の「いい人だと思つた」という八つの文字がその当時頭の中に灼きつづけられたのを記憶している。「いい人だと思つた」真理先生を、そつくりそのまま路郎先生に移しかえて「いい人だと思つた」のである。今日読みかえてみて、七八年前の印象の記憶とは少し違つたニュアンスではあるが、しかも、一層くつきりと路郎先生のご遺影が浮きぼりされて来る感じがするのである。そして先生の足蹟の偉大さというか、真剣味というか、ひしひしと身に迫つて来るものを感じるのである。

路郎先生今やなし。しかし先生が蒔かれた文芸的種子は、われわれが想像する以上に、広く、深く地上に芽ばえて来つた。聖書にある言葉の通り、幾千人の胸に植えつけられた一粒の麦の芽は、幾千人の心の中に、すくすくと、育ち、栄え、実を結んでゐるのである。

トルストイは言つた。天才にとつては、生も死も同じことであると。まさに至言である。

われわれは今日、路郎先生の死を悲しんでばかりしていることが、どうして許されるだらうか、又ご靈前に香を焚き、お花を供え、万巻の経を献ずるだけでは絶対に先生はお喜びにならないと思う。ご生前の胸の中を常に去来して居た、短詩文学を基礎とした日本文化の向上への大慈願達成、われ等はかくの如く弱体非力ではあるが、全力をここに打ち込み精進してゆくことこそ、み霊をお慰める唯一の道ではないかと考えるのである。

先生とお別れしてから一年、門下生一同は乏しいながら

も全能力を集めてご遺訓を護り、最後の一线には先生の門下生であつたことの誇りと名誉を傷つけないように相誓ひあい、極めてのろいテンポではあるが、少しづつ「川柳塔」をそだてて来た次第である。「川柳塔」の今日あるは全く先生のご遺徳と、柳界の大方先輩諸子のご庇護の恩恵に浴することばかりである。

雲の峯のかなたからは、これからも先生が手を振つてわれ等のゆくてをお護り下さること、そして諸先輩の方方も交れぬ愛情によるご鞭撻を下さることを固く信じて、明日へのきびしい道をたどりたいたいと覚悟している者である。最後に私は私の胸深く秘めている誓ひの一つの言葉を申上げてこの小文を終ることにする。

それは——「たいせつなことは、大志をいだき、そしてそれをなしとげる技能と忍耐をもつということである。その他はいずれも重要ではない」というゲーテの言葉である。

何を選んでいたぐくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

なんば本町条
大阪・東京・京都
大日本橋

川柳塔

中島生々庵選

大阪市 橘 高 薫 風

京都市 松 川 杜 的

路郎忌に炸裂したるカンナの朱
天国に節穴一つ豆秋忌

水郷（五句）

水郷の微風から雨に移る候
水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし
柳木ボブラ 柳ボブラ水郷よ
水郷の胸の高さに続く水
音のみの世界またよし水の上

犬吠崎（二句）

波のしぶき逃れて小雨降っている
灯台は灯の入る瞬時差らいぬ

古稀の阿茶さんへ

古稀清しや一輪挿しのたたずまい

苔寺にて（五句）

木洩れ陽の緑に映える心字池
向上関列の杜絶えを待つカメラ
全視界緑の中の西芳寺
三種類までは数えた苔の色
枯山水俺の眼にはただの石

竹の寺（衣笠山地蔵院）にて（二句）

十六羅漢苔寺の噂の中に立つ
参道も竹の緑の竹の寺

鈴虫寺にて（一句）

鈴虫寺五月は五月の声で泣き

大阪市 正 本 水 客

わらび御飯季節にうとい人と知る

赤い赤い夕陽を裏返してみたい
香水をふって貰って追い出され
口ぐせと覚えられてる幸せさ
肩たたき合うて別れてそれっきり
お氣をつけてと銀行のドア閉まる
もったいなく藤柵の香りへひとり佇つ

大阪市 山川阿茶

古稀の誕生日、五月十三日

朝夕の祈りは厄介かけぬこと
最後まで頼れる杖は自分です
一人ぼち噂もたたぬ年となり
今の処淋しくはない一人ぼち
鯛貰い一日早い祝膳

ベトナムの帰休兵

貸し背広銀座に立って思うこと
ノーマアテレビを切って涙ふく

大阪市 石倉旅風

刺立てて鉢のサボテン身構えず
売りものにせぬ氣の芸を見てもらい
尋常の勝負で決めた個人展
金でない錢を寸志にしてみらい
音も無く脊なに泌み入る花の雨

五月雨を傘を持つ手が聞いている

大阪市 西出一栄

春雨に桜の色香盗まれる
マニキュアをママの序でにせがまれる
画用紙へキリンの首がチョン切られ
老松の寿命へ根べを変えてやり
スモッグに汚れたままの鯉のぼり
消防車遠くに消えて又眠り

島根県 藤井明朗

満月は一人でもよし詩を愛す
収入の魅力出稼ぎ村は留守
流行はひざ頭など氣にしてず
女店員わたしもほいし柄を見せ
二十五年振り妻と同行の旅（東京）
あわただし旅でも楽しそうな妻
妻の白髪をしみじみと見る旅

岸和田市 内藤きさ子

表札のよぐれを毎日見てくらし
借用書くれとも云えず十日経ち
怒るつもりがえくぼに邪魔をされ
名セリフへ金齒が光る旅役者

八瀬大原観光

大原を墨絵につつむ京の雨
新緑の極楽三千院の庭

大阪市 後藤梅志

芸はそも鬼か女房泣かせられ
ジャリどろの築く高層ビルが建ち
食わざれば死ぬ人間の業深し

吉艶公演を見る

琴三面リードしてはめしいの手
藤娘学友ずらりかぶりつき

阿茶さん古稀

寒椿匂いこぼさぬままにあれ

出雲市 尼緑之助

耕運機音して初夏にいどむなり
有線の長い話も春のもの
行幸道今年は草にはびこられ
曲芸のように追いつくもの若さ
還暦の坂へやっぱり腰をのし

岡山県 浜田久米雄

一粉が万倍となる日を選び
ともかくもこよみが示すとおりにし
相談をすれば年寄りなにか言い
招待の酒へ相好崩れて来

小豆島いま信心の灯がまばら

豊中市 戸田古方

精進へ素直になつてくるも歳
みせしめにこらしてあと割り切れず
足手まといになつてくるのもうれしうて
こわごわに値段をつけてまけられる
勘ぐりもせずにくれしうきいてやり

尼崎市 長谷川三司

一匹の蠅へ親子のはい叩き
逢うために母に叛いた髪で出る
この辺で妥協する気の昼の酒
スモッグの話しへ朝の蒸したオル
夜桜へ女は少し飲むと云う

堺市 吉田圭井堂

喜寿過ぎて眼鏡の要らぬとうとさよ
握らせて云うなと云った口が割れ
午前様ですよと妬かぬ頼りなさ
今の間に立てと二次会先に立ち
春は花秋は紅葉と決ってず

新居浜市 小林孝正

腹立ちを拳にしまうことも馴れ
秀才のどこかひととこ親しめず

健康が憎い日もあり無為徒食

青葉吹く風さえ色のない孤独

時計だけせかせか今日も職がなし

高槻市 傍 島 静 馬

一張羅ファッションモデルの顔になり

人混みに白髪之父がすぐわかり

冗談にしてたら保険医連れて来た

ケチつけるわけじゃないがケチをつけ

歩道橋ポリスが見てるから渡り

西宮市 樋 口 舟 遊

ある謀反輩と薊にたわむれる

セーターのピンクがとけて樹のみどり

絵日子さんへ

新築の香りへ主婦の座主婦の詩

中性尼さんへ

雲東京へ去る別れたくないわかれ

祝原色出版

春草の枯れずに匂う赤青黄

諫早市 川 岡 靈 眼 子

二十万の学費肩もんでくれただけ

大阪通過

眼ります師の街夜汽車かすむ窓

東京

タワー展望妻もはしゃぐ夜景の灯

風の紐離れたように飛び回り

東映俳優田村亮来る

親爺阪妻の積りで逢うてやり

京都市 室 井 八 九 寸

針状にもみ茶揃わせ太い指

出雲紙のイノチ活かしたこよりの美

水切って背鰭光らす池の王

PTAへ出て縫紋くらべ合い

近所の児まで褒め保険腰を据え

大阪市 本 多 柳 志

安売りはしなやとはなしこわしに来

制服を脱いで乳房がよく目立ち

宿題も寄付も入れてくランドセル

無量寺へいのちの壺を焼きに行き

三代ののれんを守るビルが建ち

伊丹市 小 川 静 観 堂

入りのない芝居も株主招待券

おしゃべりも野鳥なみであって欲し

葉のうらになめくじの這う夏は来ぬ

話合いできぬ議論で話合い

注射の児　その先生へバイバイし

大阪市　中島小石

よくしゃべる人と並んだ一人旅

尼には尼のなやみもあらん白椿

春をよそに別れ話はさむざむと

あいきようがあつていいさと孫の鼻

一周忌悲しみの日のめぐり来て

ハワイ　羽佐間柳葉

身から出た錆とは知らず不平言う

好き嫌い世間知らずの言う若さ

文化とはのんびりさせぬ時代なり

浮き沈み耐えて行くうち角がとれ

炎天に働く蟻は陰を見ず

ハワイ　築山快夢起

孫にまで財布の底を見すかされ

襲名へ借金までも背負わされ

お見舞がはや折伏と云う構え

自祝

はろけくも来つるものかな喜寿迎え

令夫人レッキとしない氏素性

今治市　長野文庫

妻は染め子は裏返えし恙なく

ご近所で値ぶみしている鯉のぼり

遊んでる姿で鯉は餌を狙い

老いて子に従うわが家下宿めき

防府市　長野井蛙

立読が　ひたい越しで監視され

ひやかしをあつさり負けてあわてさせ

ニコヨンがストであぶれた足をひき

一物を胸に男の低姿勢

大阪市　市場没食子

義歯止める上歯六本頼りにし

孫抱きにゆく交通費またあがり

府庁から帰りお城の花へ寄り

膳に箸つけず包んでもろて下げ

高槻市　若柳潮花

ハンカチを敷かせてころぶ膝枕

産経ホールに出演して

裾ひいて立てば舞台は春のいろ

肩先の動きが恋にふるえて居

浴衣着て自分の顔にもどる風呂

高槻市　福田丁路

定職もなく口先で世を渡り

四十二年間の公務員生活を去る

浪人の明日のプランに腕を組み
退職の朝の大気へ胸を張り
吹けば飛ぶような退職辞令なり

下関市 国弘半休

喰うことを矯められて腹が立ち

妻の座(三態)

咳すれば半てん召上れば揚子
言い負けて女亭三日も飯食わず
神様に尻押しさせて夫叱る

児島市 本田恵二朗

不足だらだら並べるほどに暇があり

大吉と出たおみくじを信じよう

洗濯の好きな妻ですもう脱がせ

新築の主 茶羽織がよく似合い

倉敷市 木村千容

妻といてありがたきかな八十過ぎ

いたわりの妻のころへついあまえ

合掌をされると弱い夫です

いってらっしゃいを背中に青い空

岡山市 服部十九平

靴すべり汚職の酔がまださめず

珍客を奥へ通して内輪揉め

酔ざめの水へ小言を添えて出し
お隣へ負けないとする水を打ち

門真市 福島鉄児

生活がかかるかがとも斜にちび

泥棒に入られ指紋までとられ

長生をしてまんねんと妻をほめ

遅刻もうあきらめ切っている歩巾

大阪市 児島与呂志

苦楽園観桜

老木のここ一番を咲きはこり

桜ってほんまにピンクやなと思ひ

期待した通り一足先きに待ち

どんぐりの背くらべが寄る同窓会

大阪市 賀本昇

七十のお洒落真赤なベレー帽

彼岸花誰が手向けし無縁墓地

生甲斐を感じる程の人が出来

判ってますなどと反抗第一期

出雲市 中川晃男

美容師の顔サンプルに塗り立てる

女社長支えてきしむ廻り椅子

受話器手で押さえて助言聞く電話

貸衣装この花嫁は離婚した

愛媛県 渡辺 曉 童

忙しさの五日をたのむ酒二升

そそくさと食ううなぎめし下車時間

府県順写真効果の良い席次

おみやげも甘から二刀使い別け

兵庫県 遠山 可住

するめもう噛めずと力なく笑う

畑荒らす雀が来ないのも淋し

ああ遂に骨まで愛すハメとなり

次の子も巢立ち畑の葱坊主

平田市 久家代 仕男

農村の文化燕も巢をかけず

諦めた竿へ小魚ひつかり

骨までは愛し切れない年になり

五月晴れ蟻の世界も慌ただし

豊中市 寺田 花宵

母の日に(一句)

カーネーション買って帰れる娘に育ち

爪を切る縁から見える鯉のぼり

ひと口に言うてしまえば角が立ち

手をなめた犬を迷わず買って決め

兵庫縣 河原みのる

そう云えばやっぱり靈魂不滅かな

六十年歩いた足へ尙も灸

機械ノコ派手なはでな山を売り

引っぱって何がかくれよ膝小僧

青森縣 木村 涼人

鼻風邪もなんの膝上十センチ

バカバカ馬鹿とエレキは言う如く

「生活がかかってんのヨ」アイシャドー

当然の事を喜ぶ死亡ゼロ

香川縣 三井 醉夢

四十路まだ恋のむくろにしがみつ

遠景に潮干狩りあり添えぬ恋

逢うた日は犬と話して花も活け

養老院 女心の唄流れ

堺市 高崎 雄声

仕事はこちら礼は主人へ持つてゆき

手入れも届かぬ邸宅のむなしさよ

ボロ傘を戴いて借る俄雨

しんがりでよし大学へ入り込み

竹原市 杉原 愛鳩

ガラ空きのバスが走ってスト解除

税金が上っただけを精出す気

買物のゴム輪たまればたまるもの

勇退のあとへ教え子すべり込み

笠岡市 木山 遠二

老妻の貫録ハッハッと笑う

日日好日日記は二三行で足り

妻の小言ニコニコ聞いて機嫌よし

記念品金に見積もるものでなし

広島県 山内 静水

結論から言わせてもらう日のおせり

人様のお世話貧さえ忘れさせ

ワンワンがいたとお使いもどって来

内職の妻には済まぬコップ酒

山口県 安平 次弘道

御近所が後が産ぬを詮索し

避地への辞令殉教者のごとく受け

へそくりで養毛剤を買うてくれ

もったいないと母は嗅いで食べ

兵庫県 大江 秋月

蠅一匹追えぬベッドに一人居る

妻も子も居ない月曜もて余し

耕三寺にて

西遊記 地でゆく蓮を見て通り

叱られることも出世のコツと知り

倉吉市 奥谷 弘朗

自惚れが口紅からも読み取られ

かけ声を山彦にして木挽生き

昇級の予告へ立ったり座ったり

政治的配慮とやらにごまかされ

枚方市 宮川 珠笑

竣工へ土工の汗は語られず

乳房子にあずけ新聞読みふけり

酒を飲む役目もあって目出度い日

父さんが押せばブランコ揺れすぎる

大阪市 室谷 鉄舟

親の方が目をつむってる 子の注射

マネキンが 寒そな恰好で運ばれる

出勤で疲れを癒す飛び連休

ランドセルお守りつけて今日も無事

善通寺市 岡田 彰男

療養をしていてサロンプラスがいり

飲んで詫び詫びては飲んですんまへん

お手植と云うて穴ボコ掘つただけ

私鉄スト妥結

鳴動のたして二で割る式の知恵

芦屋市 丸川 初甫

カーテンの隙間も秘密気にして

損得を云い出し趣味に遠くなり

春霞ここ山崎は古戦場

京舞(中座)

鴈治郎片山春子の顔になり

大阪市 不二田 一三夫

張り込みの刑事にデート多すぎる

ウソつかなモノが云えないのもあわれ

えらいとこをえらいヤツに見つけられ

阿茶女史の古稀を祝う

こいさんのままで粹人古稀迎え

大阪府 早川 清生

英語でしゃべり日本風に笑い

都会の子遊ぶ脚下に土がない

自衛隊

営外居住弁当もつてくる

岡山県 直原 七面山

張りつめた三の糸にも似たる恋

ペチャクチャとガムを噛む娘の空ろな眼

色あせた造花にも似て妻老いぬ

青森市 工藤 甲吉

出稼ぎの半年未亡人でいる

東京に負けてズーズー弁婦郷

ふるさとは青葉に若葉母達者

大阪市 大坂 形水

そこまでの見送り駅へ来てしま

うかつにも言葉の裏に気が付かず

宿を出てコーヒーの美味いとこないか

下関市 桜川 不水

春斗へ乞食もベアを待っている

買う趣味は女性の一つそれもよし

ヒヨットコにふくれる餅と睨みっこ

今治市 越智 一水

鼻先に雪を残した石仏

娘の夢は髪伸したりちぢめたり

城下町歩く女に残るもの

児島市 伊丹 阿喜良

節穴の光の中で踊るゴミ

いい匂いさせて大阪食い所

じいちゃんの気嫌を直す孫をつれ

富田林市 浅川 八郎

行き詰り気にせずあほにおなりやす

貪欲を向上心と称えられ
橋筋の独り歩きは儼ひとり

新居浜市 近藤 凡生

五月晴れ心崩れる音に耐え
蝶を待つ花の心は静かなり
垢じみた心を恥じる五月晴

加賀市 那谷 光郎

まだ匙で食べる子があり還暦だ
それが君の恋かと豪傑笑いされ
顕微鏡猫背の学者に仕立て上げ

高槻市 山田 季賛

設備よくして維持費に困り
突貫工事へ雨もりなど言うとなれず
事故起きて始めて次のプラン立て

大阪市 河井 庸佑

逆療法とかで強気に押し切る氣
満開をしのぶ葉ざくら見て帰り
ほんとうにエプロンで来てあわてとり

大阪市 福井 野迷路

目が醒めていのちある句をもう忘れ
宿六の趣味のコーナーにフライパン
鳥のない空ジェット機の尾が長い

岡山市 江国 幽谷
獲らないと知ってか雀近うより
部長席までも小声で話しだし
破産した会社の前で振り返り

奈良市 宮口 笛生

興福寺縁にうつる五月の日
若草山鹿も斜についてくる
メーカー参加働く者の幸とする

大阪市 米虫 一乃字

苔で字が解らぬ句碑を写して来
パチンコの釘ほど守る子の野球
独り寝をドキリとさせた窓の外

高砂市 吉原 紅月

ガム吐出して生意気な口を利き
月並みな料理で妻に飼育され
気前のよい男にさせる大ジョッキ

大阪府 西 いわを

応揚に歩く動作が純りかけ
停年になつて笑顔を見せ歩き
植木市なんぼでも良い持つて行け

神戸市 仲 どんたく

満員車四苦八苦して読んでいる

早いものだと一言 定退す

法隆寺にて

御仏は八頭身でおわしまし

大阪市 金井文秋

三人目の孫生れる

丙午気にせず産んで男の子

金がかからぬとまじない念を押し

母の膝独占させぬ双生児

岡山県 田村藤波

幸福の扉を開く弱い弱い腕

贅沢は腹にたまらぬ物を運り

御仏の召し上る間が子に待てず

京都市 都倉求女

村を市に化かして分譲地に仕立て

プラカードマンだけ信号守ってる

解散のあとが目当てで行くメーデー

岡山県 池田古心

釣れた日の夕餉天狗の鼻が伸び

売るでなし喰うでもないが釣りに凝り

早期発見医者癌で死に癌で死に

兵庫県 小西無鬼

責任のないのがハッパかけに来る

気の弱いのが人混みではぐれかけ
大いなる愛は涙の眼を閉じて

大阪府 谷沢好祐

遊園地くず籠にまでスポンサー

ムード料つけばビールは高いもの

パパ起きて来ぬと子供が叱られる

京都市 大鶴喜由

モデルは悲し縦横から見られ

レオポンに似た句を眺め淋しい気

老いたりとして昔を語る目鼻立ち

岡山県 大森娛句楽

大学を出て戻らない貰わない

親しさがちよこにあふれる久しぶり

当たたらご免なさいとへらずぐち

倉敷市 野田素身郎

春うらら今日は子供を叱るまい

鯉幟まで公害で色が褪せ

保険屋が事故死を得したように言い

愛媛県 村上旭童

農夫四十夕日へ疲れたなと思ひ

冷蔵庫麦茶を冷しくたびれる

杭うって又良田がつぶされる

鳥取県 清水一保
もう十年若くばと思う五月晴れ
大山も衣替して客を呼び

反抗期我にも覚えのある小言

松江市 柳 楽 鶴 丸

産声がパパ頑張ってネと云うように
一人で出ても二人で出てもひやかされ
来年頃先の丸い靴になり

宝塚市 小 畠 無 聖

女神まで裸にさして芸術美
十本の指それぞれに面白し
妥協という嫌な世間へ出向く靴

大阪市 今 西 章 雅

目と鼻のところへ儲けた友がくる
大学も行かせてやったに筆不精
まちまちの額に気使う内税

加賀市 木 村 一 路

妥協せぬ妻は無言で編み続け
かりそめに叩けば妻の肩細き
父の日は決めず毎晩飲んで来る

西宮市 若 林 草 右

時刻表見上げる顎に剃りのこり

堂々と呼鈴ならし屑屋来る
捨てるところあるまでガムを噛みつつけ

大阪市 中 川 滋 雀

自動式若手と五階まで歩き

仕組まれた議決の拍手へつりこまれ
酒煙草止めたと三日目を自慢

布施市 渋谷 三 時

夏姿パパーとまわり若くなり
お遍路はみどりの寺で稼いでる
雨洩りを受けてるリズム子は歌い

小松市 関 戸 宗 太 郎

清流へ投ッ返した石の色
ジャンケンに負けて町議を棒にふり
秘中の秘なのに床屋がすでに知り

三次市 和 泉 松 風

リードされ幸せそうな老いた妻
結婚と満期貯金のスケジュール
保険などけなして今日も梯子酒

鳥取県 渡 辺 乱 坊

丸見えの隣の部屋も覗いとさ

花湯祭(二句)

孝行の真似事父母と祭見る

花屋台止まればコップ酒廻し

大阪市 宮尾 あいき

猫の手も借りたい朝のバスを待ち

鯉のぼり尾っぽが重い曇り空

タンポポに足を取られて土手を落ち

鳥取県 田中 蛙眠子

口笛と駆けっこしてる初夏の風

教師という誇りつんどく本を買う

見合い後のお茶を重ねて所望する

大阪市 本庄 金三

前号のつづきものから先きに読み

からつぽの頭が白髪気にしだし

満期日に来て行員にねばられる

宇都市 平田 実男

迷うことなんかなかったハネムーン

トタン屋根暑さ寒さがつつ抜ける

雨蛙てるてる坊主へにらまれる

岡山県 藤原 秋月

日記からまたあふれてる嬉しい日

譲られた席へ素直になれぬ歳

見てほしくないとも見る他人の目

出雲市 原 独仙

それからの二人を月は知っている

中風の祖父も這い出る五月の陽

吟行の人と乗り合い旅愉し

大阪市 天正 千梢

退職金庭広うとつて石も置き

幸うすき妻と来世約し逝き

一人居のわびしさ金魚へも話しかけ

加賀市 細呂 木魯木

恋すれば時間のやりくり上手くなり

恋なんかおかしくつて自己ざまん

軒並の自家用車へ老父の一徹さ

大阪市 川口 弘生

掲示板の遠足中止を陽が照らし

人も又雌伏の時は穴を掘り

四十才これでいいかと思う日も

大阪市 福井 多蘭子

嫁入りのための受験校を決め

ハイウェイ下手が上手を避けてゆく

進学が人生の総て春がくる

大阪府 高津 徹也

梅雨の雷 屋根を小走る猫の影

耐病へ妻は網戸を新調し

父逝く

“堂々たる人生”とは父のこと

米子市

石坂新雪

我家とはコードを下げて住む暮し
髪質はやく息子をはがゆがり

小松市

馬場魚山

国道を外れて歩行者ホットする
リバイバルショー定年の気がはずむ

加賀市

大山雅城

満開と云えば桜の散りはじめ
よしよしと聞いて心は決めてをり

岡山県

横山一声

母の日の御馳走結局母がする
保険屋の花輪も事故死へお供し

今治市

小笠原青女

メーデーの風船のどか五月晴
人不足子供みこしがはばきかせ

守口市

羽原静歩

たけのこの地方送りを横目で見
役職が欲しい会議でもめ続け

富田林市

岩田美代

泣く時に泣き度い部屋ほし大家内

石ごろごろならべた床の間もて余し

京都府

西村句楽坊

師の歳を越えた小僧が立つ墓前
師の影を踏みたい思い墓参して

福岡県

太田湖平

遠来の友ダシにして昼の酒
釣瓶ならこれ程汲まぬ風呂の水

総社市

野々口美舟

宇宙にも法則がありランデブー

片想い宇宙見上たランデブー

― 自選 ―

若本多久志

久し振りにお目にかかった本わさび

妻や子よさわさり乍ら酔心地

夕方出勤 そんな女に養われ

自動販売機でも同じ値

御先祖はどうおつしやるかストラックス

菊沢小松園

人間の手では届かぬ蟹の穴

蝶になる毛虫と知らず踏みつぶし

蛸焼の蛸にもひびく価物高

いつそもう膝上五〇で行きなはれ

しあわせなことも無かつた掌を見つめ

中島生々庵

今頃やつと　かなし　さびしという心

かなしみに偽りがあり涙湧かず

法灯を守る泣きたくなる日もありはあり

夢でなりと逢えそうなのに一周忌

足る知ればもう倦怠がしのびより

松江梅里

過去秘める女に暗い翳があり

つけとどけ効いて看護も行き届き

美辞麗句古都を讃えるバスに揺れ

給金を楽日に直す勝名乗り

大臣を漫画に載せてこきおろし

清水白柳

それなのに何のうたがいさえ持たず

妥協もやむなし親類というきずな

矢車のまわる音から湧く希望

手を出したくるまに仕方なく抜かれ

電気のかぎりとは情緒のない伐木

川村好郎

金の話とうとう出した泊り客

閉会の辞待つてたように腰をあげ

ジグザグを解けば知性のある男

鯛ほめてとなりの鯖を買うも妻

駅の名を逆に読むもひとり旅

北川春巢

座れば眠り立てば読む通勤車

地下街の気楽さ無名人になり

クロークを信じお金は肌につけ

バードウイーク鶴の一声聞くテレビ

制服の処女せめてもの派手な傘

西尾 栗

或時は祈る心で受話器持ち

夕桜土産物買いすぎたなと思ひ

バラ垣の主は戦争未亡人

伝書鳩のような夫となり果てぬ

見学団スカウトしたい娘をみつめ

★

誤植訂正

川村好郎氏の四月号と六月号の作品を左のように訂正いたします。

靴みがき威勢よいのもあわれなり

出張からの電報　銀行も待つており



1962年7月10日、七十四回誕生日記念・生々庵氏が贈くれた大鯛をは
さんで自祝乾杯の路郎先生と葭乃先生

路郎百句

「路郎百句」は、なるべく路郎のカラーを失しな
わぬようによりぬきました。

路郎の性格、その身辺、嗜好なども考慮にいれ、
句の出来ばえだけにとらわれず慎重に句集「旅人」
から抜き、「旅人」以後の句は辞世句二句だけにと
どめました。

麻 生 葭 乃



米本貴志子さん方で路郎先生と霞乃先生

(年代不明)

見渡すとユダのころをみんな持ち
居候もおんなじやうに家をあけ
無情とや猫も錦魚も死んで見せ
お互ひの世にせうとしてかどがたち
寝転べば畳一帖ふさぐのみ
食ふべくもないのに被てる縞の羽織
その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
独り身へ余所の時計が鳴るのなり
弱点を握られていて二号にし
急所とは知らずに云つて左遷され
嘘を云ふたがどうしたに困るなり
女中の子血の冷めたさを思ひある
人妻のあまりに長き袂なる
長靴が蛇にも見えて灯がともる
君見たまへ蒺藜草が伸びてゐる
駈落に旅の花火の淋しうて



明治三十三年三月二十五日
十七歳、このころから川柳
をはじめられた。

後家の相談こそばゆく聞く
ふと眼をやれば煙突にけむりなし
気の弱いくせに鱗の帯をしめ
春の僕ただ良寛をこころざす
凡聖一如元旦のこころ知る
元旦も二階二日三日も二階に居
本復をして辛辣な口をきき
春の草代議士などに踏まれるな
エキストラ雲を見てゐるのもまじり
私達と複数で云う愛しよう
草の根よ僕も闘ふ草の根よ
古くとも僕には仁義礼智信
人類は悲しからずや左派と右派
涼み船水の深さをききたがり
元旦だせめて眼鏡を拭きましよう
腰のひくいことも家主にひけをとり



一九一七・三・二五
右 食満南北先生
中央 路郎先生
左 岸本水府先生

酒とろりとろり大空のころかも
なあちろりこれから秋に親しまう
吞ます氣であるに資本家ののしられ
三人が酔へば三人らしくなり
女房の予感は吞んで来るにきめ
みな吞んでるぞビールが散るぞ夏
酔うて来て既に零時をすぎた水
行末はどうあろうとも火の如し
友達をみんなだまして南に居
逢ふだけでよかつたころの菜種咲き
恋の罨あの眼だらうか眼だらうか
抵抗のきかぬ媚態にまばたいた
愛人が雪の中の黒点となりぬ
もう未練ないが糸屑とつてやり
椅子の背にもう青春が消えていた
秋さらり銀の襖のものおもひ



大正十三年十月五日
六甲苦楽園
路郎先生と井上剣花坊先生

名をすてて十七八の恋もせむ
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
屋の風呂泳ぐ氣にさへなる父よ
妻や待たむ靴音を高めんか
父の汗これで何人食ふことぞ
子よ妻よばらばらになれば浄土なり
母の子に違ひはないがアナキスト
子を死なし学校に子の多いこと
すべりんこ親は涼しいとこで待ち
母親は人出を聞いただけでやめ
子沢山僕の枕は何処へいた
慰問文子は鶏の数も書き
一ト幕見みそめたとこで放り出され
水車小屋ここから隣り村になり
夕桜名もない橋を渡つて来
次の間でもう葬式の予算立て



グライダーにのる路郎先生
(昭和十三年)
(稲津飛行場)

腕白がそうかやつたか体当り
泰にいるそうなと稲の草をとり
敵前上陸僕はふじみにて候
聖書一冊菊一輪の二階也
拾ひ屋のすがたも霞む窓にいる
選挙違反あの料理屋の灯を思ひ
燈下管制そこへ大きな月が出た
おばアさんの部屋で鉄の音がする
借りる気で行けば有馬の夏と聞く
羊羹の少しかたいも旧家らし
雑兵に拝まれにけり選挙権
ひるひなか蠅とる用があるばかり
古本を売つて二階の暇乞ひ
番傘に残る先祖の何右衛門
河豚だ酒だ男ざかりのうれしけれ
昼寝から海岸線がのびてゆく



大正十二年五月
鳴尾時代の路郎、霞乃両先
生
「君見たまへ蒔草が伸び
てゐる」は鳴尾時代の作品
である。

チウリツプ鍵を預る人に咲く
夜店出し余所の時計で去ぬ仕度
その乞食歳のわからぬほど汚れ
鶏を追へば踏切越して逃げ
党のため海鼠になつたおそろしさ
本堂を降りると嫁の傘が待ち

大正天皇を悼み奉る

草莽の臣かなしみの炭をつぐ

首相逝く

待つたなしの歩にさされたる犬養毅

新郎新婦に捧ぐ

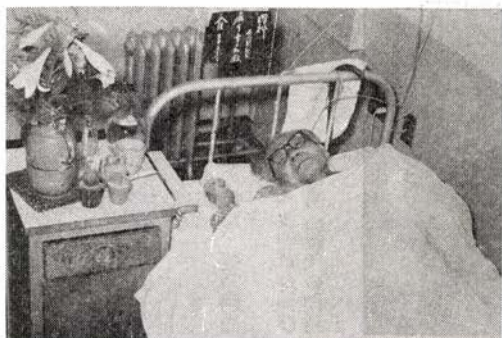
よしや道は遠くともふたり

山中温泉にて

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

雨の松本

遠く来て信濃に山のない日なり



昭和四十年（七十八歳）
入院中の路郎先生

簑虫庵に芭蕉を偲ぶ

みのむしの何代目かがぶらさがり
大和飛鳥にて

むかしむかし明日香にちりし桜散る

奈良東大寺

奈良次郎つかい果した人も聴く

奈良奥山

寝仏を歩け歩けが通り過ぎ

聖徳太子之像

一ト握りああ人生は和に如かず

奈良菖蒲池遊園地にて

夕桜とんぼがへりがしてみたし

奈良室生村三本松山荘にて

名も知らぬ山の起伏をうれしがり

辞世句

いつの程にかブックエンドに似てわれも
雲の峰という手もありさらばさらばです

旅人としての 路郎先生

— 路郎先生の思い出 —

北川春巢



天津共同墓地にて外人墓と路郎先生
(昭和十三年?)

路郎先生が亡くなったのはや一年経った。ついでこの間のことと思えるのに光陰矢の如しとか、しみじみと月日の経つことの早さが思われる。私は先生のご葬儀の弔辞に

添削をして頂けぬ弔辞読む

春巢

という句を詠んだが、その後は何か書くようにと編集局からいわれながらも、何も書かなかった。この句の如く、先生にもう添削しなくてはならないと思うと、書くことが恐ろしくなってきた。先生に添削して頂けると、多少間違っているかも知れぬと思う原稿も大胆に書いたのだが、それがしてもらえぬと思うと、どんな偉い人に読まれるかもわからぬ雑誌には、とても書けなかったのである。

しかし、先生の一週忌に際しては感慨の深いものがある。思い出だから思い違いということもあるかも知れぬが、お前は間違っているぞ、と先生から叱られることもあるまい。添削して頂かなくてもよい、と意を決してペンを取り上げた次第である。

今から凡そ二百八十年の昔、元禄二年（一六八九年）、芭蕉は江戸から奥州へと旅をして「奥の細道」を書いた。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず……

と有名な書き出しの文章である。路郎先生も旅がお好きであった。先生の句集「旅人」の題名も、その意味であったと思わざるを得ない。芭蕉のいう如く、去る年来る年は永久にとどまることのない「旅人」であると共に、「人間」も人生の「旅人」である、というような哲学的な考えから、ご自分を「旅人」になぞらえられたのであらうと拝察している。が、そんな意味でなく、本当の「旅人」として先生はかなりあちこちと旅行をされた。私のお伴をした旅も二、三にとどまらない。先生の一週忌に際して、その思い出などを書いてみようと思いついたのである。

裏日本 酒よほのほになつてくれ 路郎

「海岸には幾艘かの小舟が砂浜に引上げてあるし、屋根の上には漬物石のような石がたくさん並べてある寂しい裏日本を旅した時の句であります。」と、先生はその著「新川柳講座」の「旅の句のこと」の所に書いておられる。また、前の句に続けて

空気枕の空気が抜けりや青森さ 路郎

「あと七分で青森でございます。どなた様もお乗換えでございます。船名は翔鳳丸でございます。お忘れ物のございませんようには。」こんなごいしますづくしを聞かされながらばつぱつ靴をはいた時に出来たのがこの句でありました。」と句ができた時の様子を書いておられる。

先生が裏日本を通って青森へ行かれ、更に北海道へ足を延ばされた話は、私は伝説のようには何度か聞かされた。どうせその折の様子

は「川柳雑誌」に委しく出ているだろうと思ふのだが、今の私にはそれを調べる暇もない。そこへ幸運にも「川柳雑誌」四百号記念に橋高薫風氏が調べて発表された「輝やく巨歩」なる記録を発見した。「川柳雑誌」の歴史は、先生の歴史でもあるのだから、私はその記録を拝借することにした。

私が「川柳雑誌」を読み初めたのが昭和九年であり、雑誌が創刊されたのが大正十三年であるから、先生のご旅行は、私が雑誌を読んでいない間のことであろう。「輝やく巨歩」によれば、先生はその間昭和三年と昭和五年との二回、北海道へ行っておられる。「昭和三年八月十六日、北海道周遊の旅へ」と書かれ、また昭和五年「裏日本・北海道・東京へ。第二回海峽親善川柳大会（五月十八日函館）へ出席」と書かれている。そのどちらかの折の作品と思われる。

昭和三十三年には、薫風氏帯同で青森の東奥日報社主催の川柳大会に出席されたが、その様子は私も雑誌で読んでよく知っている。その時十和田湖に遊ばれた句は

十和田湖よ みな酒になれ旅人へ

路郎

であって、私は大いに感嘆したものであった。この句にも先生は「旅人」ということは使っておられることは注目すべきであると思う。

私が旅先で初めて先生のお顔を拝したのは昭和十四年三月、尾道市で行なわれた「西日本鉄道人川柳大会」に、出席した際であった。私は当時大阪の鉄道病院に勤務してい

て、大鉄川柳会のメンバーであった。大鉄川柳会には当時正本水客・岡田某人・梶川蘇堂・阿万万的氏らのソウソウたる柳人がいた。広島からは浜田久米雄氏ら、下関からは故多田市太楼氏らも馳せ参ぜられて私は隅の方で小さくんでいた。出席者三十人に近く中々の盛会であった。先生がどんな柳話をされたかは全く記憶にないが、尾道は先生のご郷里だとのことで、句会の前に市内を視察され、

また菩提寺のお墓にも参詣された由、いつか水客氏が書いておられたのを読んだ記憶がある。私は後から遅く着いたので、そのお伴はできず、また翌日の勤務のため、夜行列車で一行とは別に早く帰阪してしまつた。尾道には千光寺山という風光明媚な山がある。さぞ高い石段があつたのであろう。「石段」という席題が出ていた。

このご旅行のことは「輝やく巨歩」には採られていないが、私には忘れられぬ思い出である。

それより以前、昭和十三年九月十八日から同月二十一日まで、一カ月余にわたって北支蒙疆の旅に出られたことは、古い柳人なら誰でも知っているであらう。本稿では抜くことのできぬ先生の「旅」である。先生は旅先きで多くの句を作られ、あの大型の「川柳雑誌」にその紀行文と共に連載され、また雑誌の表紙にも大同の石仏と一しよに写った先生の写真が何カ月も使われていた。昭和十三年といえは日支事変中であつたし丁度元禄の昔芭蕉がみちのくの旅へ出掛けたのと同じよう

な決心が必要ではなかったかと思われる。「奥の細道」には

……千しゅと云う所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて幻のちまたに離別の泪をそそく

行春や鳥啼き魚の目は泪

と芭蕉は心細くも書いているが、路郎先生のご心境もこのようであつたのではないかと拝察できる。

その後、戦争はいよいよ苛烈となり、昭和十八年の十二月一日には雑誌奉還号が出された。先生が伊賀・大和へ疎開されたのはいつごろであつたか、私にははっきりしない。私の方も病院の仕事が忙しくなり、軍医予備員という軍医の講習会にも召集され、いつ本物の召集が来るかも知れぬ時代になって、連絡の紐も切れてしまつていた。

戦後、昭和二十一年雑誌は再刊されるようになった。先生がいつごろ疎開先きから万代のお宅へ帰られたのか、それも私にははっきりしない。が、昭和二十一年四月、第一回衆議員総選挙の際には、大阪第一区から立候補されていた所からみて、もうそのころは帰阪しておられたと推察される。私は当時滋賀県の疎開先きから天王寺の鉄道病院まで通勤するのが精一杯で、そのためか何も覚えていない。

先生のご疎開は、いってみれば芭蕉が京都嵯峨・去来の落柿舎にしばらく住んだのと似ているとは思えないであらうか。芭蕉の落柿

舎泊りは約半月だったが、行くも旅、戻るも旅、とどまるも旅、一日一日が旅で、一生が旅であると芭蕉は思っていたのだ。路郎先生も旅の何年間か、何カ月間かを伊賀・大和で過ごされた。そして多くの句を作っておられる。先生の第二句碑の

名も知らぬ山の起伏を嬉しがり 路郎

の句も、この間の作である。芭蕉の落柿舎での句は「嵯峨日記」に出ているが、先生にも「嵯峨日記」のような「大和日記」がほしい所である。

昭和二十五年九月十七日には、岡山県弓削駅前先生第三句碑

俺に似よ俺に似るなと子と思ひ 路郎

建立の除幕式があり、それに続いて川柳大会が開かれた。私は当時高砂の鉄道病院にいたが、高砂の柳と共にその句会に出席した。先生は前夜から来ておられたが、柳話をされる時に、川柳の型式を卵にたとえて話をされた。その前、卵は黄味と白味で、蛋白質と脂肪からできているのだが、殻は何だろうかと私に向って確かめられた。殻はカルシウムである、何でも几帳面な先生のご性格が出ていたと思った。

その同じ年、十一月二十三日の勤労感謝の日、国鉄高砂工場の文化祭川柳大会にわざわざ日帰りで高砂まで来て頂いた。おもてなしも、おかまいもできなかったのは今でも心残りだが、これも弟子である私の願いを快く引き受けて下さった有難い先生のお心である。

と、これは以前に書いたことがある。あくる昭和二十六年四月二十二日には、岡山県吉永町の大森娘句楽氏邸内に先生の第四句碑

古くとも僕には仁義礼智信 路郎

が建立され、先生は前夜から単身吉永町へ出向かれて同邸に泊された。私は当日高砂から除幕式に参列した。除幕式は仏式で行なわれ、式後記念川柳大会が挙行された。これには大阪からも多くの柳人が参加、出席者五十一名と、久米雄氏の手記に委しい。現在、大会といえは百名を越すことは珍しくないが、当時の社会情勢で、しかもこんななかへ多人数の集りは珍しかった。先生も上機嫌で、兼題の軸吟に五句を発表された、と久米雄氏は書いておられる。題は「命」だった。

余命わずかをこたつとは淋し

いのちには別条ないがと金がなし

死ぬ一歩手前節操汚すまじ

名人は一代不肖の子を育て

会の後の祝宴も大いにはずみ、当夜帰る予定であった私も、終列車に乗り後れる醜態だった。当時は非常に酒の少ないころだったのにそこにはふんだんに酒があったのである。

同年十二月、山陽新聞社主催で、「夕刊山陽」の第二回新聞読者川柳大会が、岡山市の同社講堂で開かれた。前年の十二月に第一回の大会があったがこれには私は出席しなかった。昭和二十六年の五月には私は鉄道を辞して、大阪に帰り大阪市交通局病院に就職し

ていた。久米雄氏のお勧めもあり先生のお許しも得たので、私はこの第二回大会にお伴をして出掛けたわけである。前夜は先ず吉永町の久米雄氏邸における備前支部の忘年句会に出席し、大会当日は吉永町から久米雄氏と同行して岡山へ乗り込んだのであった。久米雄氏邸に泊めて頂いたのは、春の句碑建立の時の備前支部の歓待ぶりがあるし、かつたので、再度お邪魔する気になったのである。なおこの旅行には、もう一人上田翠光氏が大阪から同行されていた。三人で久米雄氏邸に泊ったことになるわけだ。久米雄氏は大阪鉄道局から昭和十一年に広島局へ転勤され、昭和十九年からは岡山管理部に移られ、吉永の自宅から岡山へ通勤しておられたのである。お宅は普通の農家のような作りであるが、座敷の襖には大阪時代からの路郎先生の短冊が一面に糊で張りつけてあって、あっと目を見張らせた。「夕桜とんぼがえりがしてみたし」「三人が酔えば三人らしくなり」などなど、私の知っている句もあったが、

真つ先きを歩く路郎は酔っている 路郎

という句は、初めて見た句であった。どこで作られたものか覚えていない、というのが先生も久米雄氏もお答ええだった。恐らくどこかの旅の句会後の二次会あたりではないか、と私には想像される。「川柳雑誌」のどこかに出ているかも知れぬが、酔筆であり、あるいは記録に残っていないかも知れない。この稿の中には非加えておきたい句である。

岡山読者川柳大会も出席者百四十三名と

いう盛会だったと当時の記録に残っている。前にも書いたが、第四句碑の大会から一年半ほど経っているとはいえ、当時の情勢としてこのような多人数を動員できたということは選者路郎先生の偉大さと、新聞というものの偉力をとほつきり示したものだといえよう。

少しとんで、篠山支部の大会に先生ご夫妻揃って出席されたのが、昭和三十年四月十日だった。この時も私は先生のお伴をして出席したが、お近くの戸倉普天氏や、また大阪からは西尾榮、森下愛論、高崎雄声、故武部香林らの諸氏が出席された。私は勤務の関係で懇親宴の途中から中座して帰席したが、先生はその夜は篠山にお泊りになって夜桜に二次会まではゆくつもり

わらじ酒さらばさらばとバスが出る

同 路郎

という二句を雑誌に発表しておられる。酒はもうかなり出廻っていたのだが、篠山の酒は灘の倉出しを杜氏が持ち帰ったもので、特にすばらしいものである。

あくる昭和三十一年五月十三日には、鳥取市復興記念川柳大会が同市児童会館で行なわれ、前日の急行「いづも号」で出発され、これにも私は交通局の富岡淡舟氏と共に同伴した。同夜は山陰の名湯三朝温泉で歓迎会があり、これも中々の盛会で大阪から一しよだった川端鬼酔氏の美声は山陰の人々を驚かせた。鬼酔氏の唄の後は、淡舟氏や岡山からの久米雄氏らと湯の町の探訪に出掛け、その後の先生の様子は知らない。が、先生は「三朝温泉にて」と題して、「川柳雑誌六月号に

混浴に男の方もうしろ向き

路郎

失礼失礼と混浴へためらわず

同

三朝ふし帰しやせぬとは誰のこと

同

橋ぐらいまでは見送る温泉なり
と発表しておられる。当夜の様子も想像されそう。

同

あくる日は三朝から鳥取へ出て会場の児童会館へ。私はやはり勤務の関係で三時には汽車に乗らねばならず、先生のご講演の熱弁の長さにもハラハラしていたことが記憶に残っている。句会の後で砂丘の見学などもあったらいいが、それは私達が帰阪の途についた後であつた。先生は「鳥取砂丘」と前書して朝鮮はどこやと談す砂丘なり

同 路郎

砂丘では学者の如きバスガル
砂丘通けしサンドスキーのアブレり

同

と発表されている。第一句にはやはり「旅人」としての先生の片鱗が出ているように思われる。

その他、私が大阪へ帰って以来、大阪通信病院の「烏ヶ辻川柳会」に先生のご推選により客員にして頂き、旅行とはいえぬかも知れぬが、毎年五月頃にはきまっておちこちと郊外への青葉吟行があり、たいていはお伴をしたものであつた。烏ヶ辻川柳会も発会以来の尾崎方正会長のご逝去後、若林草右先生が会長を引き継がれ、草右先生定年ご退職後は足立春雄先生が会長になられ、春雄先生徳島大学教授に就任後は現在田中十方先生が会長をしておられる。前々代の草右会長が路郎先生を日赤病院で診察されておられたのも不思議

議の因縁だといえよう。日赤病院へのご入院も、路郎先生には「旅」であつたことであらう。何度も引合ひに出すようであるが、芭蕉が大坂で発病して、花屋仁左衛門の家の裏座敷で亡くなったのに似ている気がせぬでもない。

先生はご自宅で亡くなったのだが、ご入院中からすでに死を見詰め、

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

路郎

死の影が紋十郎の背後から

同

臨終が冬なら「いろは」おくりで

同

などの句を作っておられる。自宅で亡くなられようが、病院で亡くなられようが、あるいはまた大阪以外の土地で亡くなられようが、先生には「旅」であつたことに違ひはないのだ、と私には思われるのである。芭蕉が旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

という句を作って、これは辞世の句ではない、といった由であるが、先生にも辞世の句

というものはなかったのではないかと思ふのである。「雲の峰」の句にしても、「旅」へ遊びに行かれるような感じが私にはしないでもないが、どうであらうか。

路郎先生の一周忌に当り、私は先生の愛しておられた「旅人」としての先生を思い、私とめもなく書いてみた。ひとつの「旅」にお伴をしただけでなく古日記を捜し句帳を繰ってみれば、いくつでも書くことはありのうだが、多くを書くとして却ってまとまりのないものになつてしまつたことをお詫びしてペンを置く。

川傍柳 初篇研究

(三十七)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 故高須啞三昧

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

408 仲条姫のやうなのがおろしくる

其己

藤井||これは仲条姫と墮胎専門医の中条とをかけただけの句。仲条姫のような上品なお女中が、中条へ墮胎しにやってくるなんて、人は見かけによらぬものだという句高須||賛。「中条」へ中条姫のようなの

が来たというだけの句。それで中条姫とシヤレたので、人は見かけによらぬもの、という感じを詠んだものであろう。
清||言葉の遊びにすぎない。
丸・岡田||賛。

409 恥しさするめの木口切でのミ 眠狐

藤井||木口は小口の宛字。鯛の小口をのむと墮胎の厭勝と俗信されている。地方に

よって、は、鯛の頭がいいとされているといわれているが、効果のない俗信であることがわかっていても、薬をもつかむ心でのだ。恥しさというからには、この女不義の子を妊娠したのではなく、子沢山のため、心だのみに鯛をのんだ女房ではあるまいか、不義の子ならもっと効果のある手段をえらぶだろう。

川端||賛。不義の子と解する。

高須||「するめの小口切」でのむのはどんな場合か？柳雨翁は「三々九度」と云っているが、それで「恥しさ」が出ているからそれでよからう。

清||墮胎のためだとすれば「恥しさするめの小口切を食い」となるのではないか。「で」という助詞が疑問であり、また「す

るめの木口」は酒の肴として表現されている。従って、にわかに墮胎の句と解するわけにはいかないような気がする。駄労解だが、婚礼の盃を飲む嫁の気持を詠んだもので、すぐに妊娠しないようにという気持を「するめの木口」で表現したのではなからうか。この解は考えすぎか。

丸||高須説賛。三々九度の盃事の取肴として二三本するめの小口切りにしたものを添えることは、現在でも行なわれている。

岡田||賛。藤井先生のいわれる墮胎の厭勝説は小生には初耳。何か文献にあるのでしょうか。

410 紙で手をふいて押絵と誉る也 一甫

藤井||押絵は羽子板の押絵と解する。す

ると暮に新春用の島田を結ってもらっている娘。立派に出来上ったので、髪結いが油の手を紙でふきながら、じよさいなく傍の羽子板の押絵を誉めている暮の風景。おそらく娘のひいきの役者の押絵だろう。

川端||押絵は、花鳥人物などを厚紙で切り帛布に包み物に貼りつけて作った絵で、貼絵ともいった。大奥の女中の間に流行したもので、川柳大辞典には「糊がまだ乾かず」とあり、この解が正しいと思う。

高須||三面子先生も「押絵の師匠が弟子の細工をほめてやっているのでは」と言っているが、僕は確解をとる。

前田||川端説賛。藤井説なかなか深く推察しているが、羽子板と島田の髪と髪結の油と道具だてが多く、その上、暮の風景と面白いが弟子がつくった押絵をほめている。その押絵はまだかわいていないのか、押絵をなせた手が糊にぬれているので、それを紙でふいている師匠の様子をよんだものと解したい。

清||川端説賛。「紙で手をふいて」とあるから、一諸につくっている連中がほめたのであろう。

丸||同。仲間同志で押絵を作っている一情景と軽く解しています。

岡田||同。

41 仁和寺の玄関にこゝ外科が出る

眠狐

藤井||鼎舞ひを見さるなど初手ハさわき

(傍一・9、拾五9)

の「徒然草」の鼎踊りの坊主の騒ぎにかけた外科医が、やっと鼎をはずしてにこと寺の玄関を出て行った。それで外科医も評判になるし、しばらくは外科医の待合室で患者連中この話でもちきりだったことだろう。

高須||鼎がかぶさってしまつて、抜けなくなつた仁和寺へ呼ばれた外科医者、いま抜いてやつた鼎のおかしさが、こらえられず笑いながら玄関を出る。別にウラはないがおかしい句である。

前田||高須説に賛。仁和寺の訳をしつていと「にこにこ」が大変面白く響く。

岡崎・清・丸||賛。

岡田||賛。但し徒然草の本文では、鼎法師を医者へつれていったので、外科医が仁和寺へいったのではない。句の作者の誤解の作であることを一言しておく。

412 帯代と書た手で来る離縁状

兎弓

藤井||目出度く結婚したもののがうまくいかず、程なくして破鏡の歌となり、結納書に帯代と書いた手で、今度は離縁状を書くことになってしまった。封建時代の江戸のことだから、書き手は御亭主よりも、亭主の親爺と解したいがどちらでもよいだろう

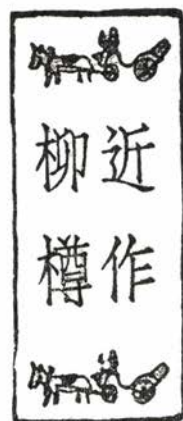
川端||結納には嫁は帯で婿殿は刀を取かわしたもので、一応格式張った式をあげたがそのうちに、家風にあわずとの離縁状になったものであろう。

高須||結納の「帯代」と書いた同じ字がこんどは三くだり半を書いてよこした、という句で、ウラのないただそれだけの、つまらぬ句。

岡崎||同じ手で書く皮肉さに目をつけたところがミソで、あながちつまらぬとは思わない。

丸||岡崎説賛。

岡田||「書いた手で来る」の「来る」を小生は重視する。里へやっておいでから、離縁状をあつち届ける場合も勿論あろうが「来る」を重くみると、これもまた松ヶ岡東慶寺に逃げこんだ嫁の句と解したい。寺ではその理非を問いただし、離縁すべきが当然となると寺にいる飛脚を夫のところへ差向けたりして離縁を勧告したのである



菊沢小松園選

大阪府 河 本 雪 男

カロリーを計つて規格の子に育て

会う為の化粧は造花に似てあわれ

傷心のうしろ姿は小さく見え

スターの座降りて人間らしくなり

番犬は悲し疑うことに慣れ

七尾市 松 高 秀 峰

慌てない方が上手に勝ち残り

生活のレベルがのぞく市場籠

干布団所得格差を目に感じ

河内長野市 森 本 黒 天 子

申し訳の柳銀座に残しとき

東京タワー皇居は下に見下され

見残した名所は地図で合点させ

神戸市 吉 田 隆 史

スーパで小さくなつて値が下り

床に石ぶとんを敷いて置く飾り

下駄箱は靴ばかりなりハケブラシ

大阪府 小 谷 葉 子

素直には意見をきかぬ父の老い

お兄さんと思つてますと手をはなし

京都で

京娘に見られたらしく道とわれ

伊丹市 春 日 青 争

この箱は何んやと小鳥のぞき込み

雨漏りをしずかにきけば三下り

自動車も手挙げる気持ちであつて欲し

大阪市 吾 郷 玲 人

遠慮しいしい長い酒になり

美の創造へ女惜しみなし

尼崎市 岡 本 昭 三

ラーメンをつくりに降りる受験の子

千円の月賦にまでも保証人

愛知県 榎

紫 光

洗われて造花も生気とり戻し

あやまりに行つて喧嘩をむし返し

布施市 坂

東 若 芽

埋め立てた隅で名残りの葦が生え

連休は子供の晴着縫つただけ

出雲市 竹

内 李 朋

お守を握つて写すレントゲン

麵棒の年期へ伸びる出雲そば

龍野市 森

下 峰 子

美人に見えるその日はサングラス

冗談も落目になつて口にせず

尼崎市 平

井 露 芳

見られてる意識後を振りむかず

敗れても巨人トップにのる紙面

大阪市 和

田 痴 亭

清潔な一夜湯の宿ぶじに明け

ふる里の小川も目高住んでいず

大阪市 森

本 良 夫

一万歩歩きなさいと私鉄スト

お手伝いだけの頭へパーマかけ

鳥取県 鈴木 村 諷 子

インタビュ―記者に笑いを強いられる
神主が打てば拍手神々し

カルホルニア 斎 藤 流 路

最小の運を拾つた銅貨なり

間違つて妻の匂のバスタオル

倉敷市 水 粉 千 翁

紹介が名刺の裏で義理を立て

そろばんが合うたとあたり前の汗

青森県 岩 淵 一 星

一生の不作と妻もそう思い

開閉が自由財布はいつもゼロ

島根県 堀 江 芳 子

背くらべする子へ膝をまげてやり

京生れですかと顔をみつめられ

竹原市 三 宅 不 朽

追越しの出来るここからよく曲り

なさぬ仲笑う事にも気が疲れ

宇部市 櫛 部 い さ 夢

長電話汽車賃よりも高くなり

二人目は胸くつろげて吞ます乳

八幡浜市 平 田 砂 生

扱までは何のよどももない手紙
セールスも信じていない説明書

石川県 同 村 虹 要

万引をしたとは知らぬ自動ドア
卒業の背広へ母の手を借りる

大洲市 堀 内 曉 風

裏切られそれから意地の金を貯め
客引きのつれ込むまでの親切さ

鳥取市 藤 本 礎 山

お迎えの車を待たす友の地位
正直が過ぎて借金断われ

鳥取市 藤 本 佳 女

カナリヤを飼つて小猫が気にかかり
山登りかけ声ほどにはかどらず

鳥取市 近 藤 秋 星

恋一つ散らしてことしの春が逝く
他人事と思えず睨閉じて聞く

ハワイ 上 田 紅 溪

貫禄が出来たと栄養過剰褒め
人口過剰交通事故で調節か

横浜市 安 藤 中 性 尼

足だけは美事な踏んばり始球する

参観日帯が結べぬ母は服

笠岡市 木 山 要 次

家柄が邪魔して縁が結ばれず
愚かさが今来た道を引きかえし

愛媛県 磴 本 満 子

飛行機事故乗られぬ身分でピンとこず
非情とも見える良人のサン格拉斯

小野田市 西 畑 霞

ぜいたくなベッドに犬が横たわり
字の欠けたネオン港で生きて居り

京都府 菊 沢 破 天

ころんでも何にもつかまらずおきて来る
びんぼうが話のすみでかしこまり

大阪府 長 谷 健 生

商魂は電話の前で頭さげ
一等地の四ツ角みんな銀行建ち

岡山県 目 賀 芳 月

訥弁のセールスだから信じられ
銀婚の旅のプランを子にまかし

竹原市 小 島 蘭 幸

温泉へ入つて気安う物が言え
遠くから見れば街の灯美しい

大阪府 馬場源吾

倒産にピラと赤旗だけ残り

幼稚園もうライバルを作つて来

大阪市 今井岳太

すばらしき落書きなれど子を叱り

かたち良く立つて待つのも女なる

仙台市 川村映輝

ビル高く高く梯子車追いつけず

住宅難家を建てれば税がくる

布施市 山下晴子

思うように咲けずに曲る花もあり

新調の服はラツシユを避けたがり

鳥取県 わたなべ・かずこ

労働歌唄う芸者の近代化

強がりには男に振られたとは云わず

広島市 上代美文

事務服を脱げばやつぱりママの顔

小銭がないので賽銭やめておき

大阪市 西堀栄子

みの虫のようにアパート抜けられず

主婦の座を嫁に譲つた気のゆるみ

松山市 西川みやこ

あれこれと聞きたい親をうるさがり

自動車学校

年がいもなく胸がなる検定日

大阪府 新田釣月

民主化は役人ふえて漢字へり

人見る目できて老眼くもりがち

米子市 林瑞枝

事故を呼ぶバスの死角を子が走り

イミテーションと見えぬきれいな指を持ち

倉敷市 水谷水

母の日をみんな忘れる程育ち

月を見る心境五十の声を聞く

岡山県 瀬戸山文平

まだ待つ間あつて女のコンパクト

奈良市 村上春己

内股で歩く美德を娘は知らず

羽咋市 三宅ろ亭

緑陰で汗を拭うも幸のうち

名古屋市 花東千久良

絵日傘へ春を惜します素足下駄

北九州市 三上春雄

ボンコツを下取りと言うエチケツト

玉島市 井 上 旭 峯
暈の目そのままはいて出る寝押し

島根県 堀 江 正 朗
満月が浮く水溜りよけて往き

島根県 石 田 清 泉
知恵のない奴 汗を出せという

八代市 永 松 道 雄
着飾つて花に負けない花見時

松江市 岡 崎 祥 月
生活のゆとりの中のお茶の味

鳥取市 藤 本 鎮 也
少年の孤独が屋根に登らせる

寝屋川市 福 富 隆 子
電気カンナ甘えるような音を立て

松山市 河 本 南 牛 史
損をすることで口下手喋り出し

出雲市 板 垣 草 丘
それとなく日にちを聞いてせく上司

西宮市 船 津 千 夏
老らくは手をとりのうて社寺めぐり

大阪市 古 川 集 一
こどもの日 産んでよかつたなと思ひ

堺市 斎 藤 亜 也
年寄に話しかけられる齡になり

布施市 晋 本 幸 子
恋をして始めて恋の詩を悟り

松江市 町 中 村 魚
病めばなお命いとしく補給食

善通寺市 岩 田 太 一
親族の出世頭が来て決り

羽曳野市 江 城 功 雄
ハンカチも疲れていますす二日酔

島根県 小 砂 白 汀
流行は不思議ひざ上気にならず

東京都 浅 野 龍 泉
お見合の写真を信じ苦笑する

羽曳野市 杉 本 白 扇
ゴミ箱の中でも花はまだ開き

大阪市 小 東 琴 女
ちぐはぐに濡れて戻つた共稼ぎ

米子市 八 木 千 代
冗談を言つて和解の機を掴み

大阪市 坂 川 有 子
騒音がとだえひとりの城となる

高槻市	山田	スミ子
足ぶみをして届かぬ狭き門		
高知県	山川	勝子
無理してる財布と知つているデート		
大阪市	西本	保夫
受付のミスでお先へ診察し		
茨木市	高木	繁太郎
不器用も努力でカバーして活路		
広島県	南条	露声
迷い子になるとは知らず子供の日		
出雲市	王	紫
撥だこの 手を見せながら芸道談		
尼崎市	井沢	正直
無意識に草ふみつけれつつ夏きたる		
大阪市	木村	濁水
腹割つて話さぬ腹の底を読み		
大阪市	柳生	政夫
婚約を急いで相手に誤解され		
大阪市	川口	弘子
迷い子も花の下では泣かず待ち		
大阪市	田中	多幸
いたい腹あの手この手でさぐる妻		

大阪市	花田	繁子
叩いてもつねつても嬉れしい恋の仲		
大阪市	谷沢	源泉
防水の時計湯船で注意され		
大阪市	多田	富士
事なげに婚約OK散歩する		
大阪市	大池	芳子
婚約をしてから後にあらが見え		
大阪市	休庭	一休
盛り場で悪口叩く河内弁		
大阪市	木村	久子
方便も腹に無い事しやべられず		
大阪市	鈴木	生仏
婚約者ペンチで耳の穴も見え		
大阪市	上林	清江
花見酒隣の組と手を叩たき		
大阪市	松岡	茶々坊
こんたんの坊や素直に肩叩く		
大阪市	田治	一登
婚約をすれば家業をつぐと言う		
大阪市	切田	茂美
ぼんばりに煙害忘れて通り抜け		

秀句鑑賞

前月号から

後藤梅志

かけ足で父のきげんのいい日なり

(水客)

この句を見ると、平凡なそして、闘争ぎらいな、一人の人物が浮かび上ってくるのである。

彼は、静から動へうつる動作が緩慢だ。静寂を好み、めったに走ることなどはしない。その彼があるとき、子供を相手に駆け足をはじめたのである。遂に子供が勝った。もう彼は限界がきたのだ。しかし、彼はまけても、それが愉しいらしい。そして鳴りそうもない、口笛などを吹いている。

大らかな、春の天気の中に、こうした「市民的」ありがたは、たのしいものである。

からまれる胡蝶へ獅子は毛振りする

(潮花)

長唄舞い、執着獅子の一場面と想像される。

先き頃、若柳流舞踊の会があり、いろいろ

な踊りを見ることが出来たが、踊りはわれわれを夢幻の境地に誘い込むもののようだ。

この執着獅子の場面などがそれだ。長い竹竿に、二匹の胡蝶がひらひらと獅子の廻りをとび交い、獅子にたわむれるが、獅子は動くともしない。なおも執拗に獅子にからみ、獅子は胡蝶に毛振りして応えるが遂に立ち上がる。こうした舞台動作は、二匹の蝶を使う二人の後見の巧みな手練によって面白くなるのだが。人間の愛情がそれだ。獅子王の戯れも見ようによっては疼くような愛情を感じるのである。

内職に藤色があるたのしさよ

(きさ子)

淋しい内職にも、藤いろの材料があるのはたのしいと作者は云う。作者の色彩感覚に敏感なことがよく分かる。藤いろは元来富貴の色とされている。しがた内職をしていてもこの藤いろの材料が散らばっていることは、

苦にならない。子供もよろこぶのである。赤や青は単色で、余りに単調だ。白は清楚だが淋しい。むらさきは同じ富貴の色でも堅苦しい。やはり平民的でふっくらしているのは藤色だ。

作者は、そんなふう感じているのである

税務署はおとぼけうまい妻をやり

(酔夢)

「そうですか」と訊かれて「はいそうです」と答えるのは、正直でよいが、世の中にはそれでは通らない場所がある。外でもない税務署である。うっかりすると、男は淡白で誘導訊問にひっかかる。男がどこかで本音を吐くと、もうとり返しがつかないのである。

その点女は徳だ。税務署も余りムキにならず、結局教えてくれる。正直に申告していても、税務署ばかりは、不安なものということを知、この句はうまくとらえている。

病む妻の子供らしさも哀れなり

(味平)

愛情をひしひしと感ぜさせるではないか。人妻の知識というものは、夫の身辺か、買物のこととかに限られ。女が長患いをする、と、すっかり童心にかえってしまうものらしい。世に中年以後の夫婦は、サクサクとした中に、互いの愛情を求め合っているが、びったり一致することはない。何かの切っ掛けが欲しいのである。

ほんのちよつとした切っ掛けから、素朴な愛情がはじまる。これが夫婦なのだろう。それが、この句にはよく出ている。

「哀れなり」という一語は、一つの愛の表現とみることが出来るのである。佳句

嫁ぐ娘の後一と月をまだ勤め

(章 雅)

もう、お嫁入りいうのにうちの娘はまだ勤めている。両親からみれば、少しは家に落付いていて、家のことも手伝つてほしいのだが、時代が違ったのか、そうはいかぬ此頃である。

しかし娘さんの方では、その一と月が愉しい。家事を見習うより、身だしなみをととのえるより、その日、一日を思うさま生きたい。若い世代には何かしら物にとり憑かれたような行動があるのだ。しよせんは親の手に負えないものであらう。

この句は、それを責めはしないのである。

看護婦が女に見える程に癒え

(孝 正)

入院した当座は、看護婦というものは、癒にさわることもあるし、万事にキカイ的で好もしい存在ではないが、病気が快方に赴くにつれて、親密になるのが通例だ。

子規が須磨の保養園で、療養生活を送っていた時、身辺の看護をしていた虚子の目に、実にいやな附添婦がいたが、子規の病い癒えて後はその附添婦が、須磨の浦の陽光にとけ

こんで世にもなつかしい存在となつたと、虚子著「子規居士と余」のくだりにある。

万象はこれ、已れの心のおもむくままに形をかえるものであることが分かる。

春に咲く花をわが手で咲かせた気

(花 宵)

春ともなれば、狭い庭にとろせましと鉢植を置き、花の香に親しむものだが。

これに手を加えなくとも、春になれば花は咲くものである。こんな当りまえのことでも、人は忘れ勝ちだ。なぜだろうと、作者はかんがえたのであらう。

禅語に曰く「煩惱あれば、菩提あり」で、大自然の恩恵をわすれてはならないものだが忘れ勝ちのもの。こんなことも、あながち思ひ出して無駄ではない。

安定所遊んで居れと金をくれ

(涼 人)

イギリスの労働党がはじめて失業保険を実施したとき、労働者が働かなくなり、国家経済は危機にヒンした。それほど健康保険や失業保険の国家支出は、増大する。社会政策は、カジのとりのようがどここの国もむずかしいものだ。

この句を見ると、失業者は、期限のきれるまで、遊んでいるのが特権であるかの如く錯覚する。国の施策とあれば致し方がないが、どうかという気もある。人によると勤めるようになって、まだ安定所からもらつてい

抜てきをされて苦しい日が続く

(虹 要)

抜てきをされるということは、よくよく腕が出来るか、課長クラスの異動があったときである。そうした場合は、よく難関がまち構え、やりにくいものだ。しかし人生にはいくつもの関門があり、それを通らなければ上進は出来ない。そうしたことを顧りみて、この句は何か示唆に富んでいるような気がする。

ひとり言にしては大きい祖母の愚痴

(紫 光)

ユーモアたっぷりの句だ。普通年寄りの愚痴は云いにくそうに言うものだが、ひとり言に、大きな声で聴かせるのは、なにか大きな不満があるのだろう。

愚痴というものは、大きな声でも、小さな声でも、ハッキリ云ってくれるのが助かる。この年寄りにはなかなかほがらかなのではない、か、というような気もある。

最高の悪相手配の顔写真

(晴 子)

この句には、モンタージュという文字がないが、それが却つて切実感をもり上げている。モンタージュは、顔の特長をピックアップして仕上げるものだが、よくしたもので、犯人の特長をいくつか具備させると、極悪人が出来あがるものらしい。作者の直感が、非常に卒直で面白い句にしている。

表 紙

久家代仕男選

思い出の日記を知っている表紙
表紙絵を横目でにらむ汽車の旅
派手すぎる表紙中身を疑われ
鉄人の表紙を子供はなさない
表紙にも落書をする幼稚園
表紙だけ残る絵本へ子の成長
すり切れた表紙句帖にある命
同人の揮毫表紙のバラが生き
文芸誌らしく表紙の色加減
六法の表紙身近でいかめしい
貸本の表紙の髭はおはなはん
全集の表紙制服着たみたい
表紙だけきれいなおし貸本屋
ガリ刷の表紙で決算報告書
趣味の本らしく枯淡なクロス張り
家計簿の表紙へ子等の寝息聞く
商魂は表紙へあぶない線を見せ
いやらしい表紙と一気に読んじ
若い頃本の表紙に出た自慢
表紙だけ残り便箋役が済み
税吏の目ごまかし切れぬ厚表紙
表紙絵の美人飯場の板に住み
気の早い表紙が夏をもつてくる
裏表紙広告料を稼がせる
つい読める気になした表紙の絵

涼人 十九平 愛鳩 清泉 金三 弘朗 静水 芳子 凡九郎 春己 保夫 惠二朗 李朋 千翁 白汀 昇次 明朗 魚水 己峰 旭松 祥風 月

表紙めくればシャンと構え謡曲本
スタンドの影へ表紙のクラシック
大福帖表紙の文字は父の筆
秀才が読めば表紙が少しずれ
新年度表紙も替えて忙しい
表紙から飛び出すほどによく笑
一枚の表紙で値切る古本屋
表紙がきれいな買主まで積ま

住

横文字の表紙を見えるように持ち
死に子の辞書の表紙のカビを拭く
飾り気を捨てた表紙のそれがよし
掘り出しの珍書表紙がもげかり
友情が初版の表紙書いてくれ
官庁は表紙に四角な判を捺し
もの知りがいつも表紙を見て帰り
なれが来てうれしや辞書の皮表紙
家計簿の表紙手垢で汚れてい

人

懐かしきかな国語の巻の一

地

天

雑音の末は表紙を無地にする

軸

戸籍簿の表紙は重い音で閉じ

か

げ

口

雄

声

惠二朗

古

方

か

げ

口

古

方

雄

声

惠二朗

古

方

藤井明朗選

かげ口も吹き飛ぶ程の家を建て
縁談をこわすかげ口とも知らず
蔭口を気にしちゃおれん濃化粧
かげ口を謀略の一手として使い
かげ口が趣味で噂を仕入れて来
かげ口を聞き役になる職に生き
かげ口を有に屋台の夜がふける
かげ口のまんざら嘘でもないら
人間の弱さかげ口から解り
かげ口の根は同じところから出
聞き捨てにしたがかげ口気にか
かげ口が女ひとりをはっとかず
かげ口へ知らぬが仏デイト行く
かげ口を妬かすつもりで播き散
合槌をうったかげ口後でもめ
かげ口をたしなめられてすねて
聞き捨てにしたがかげ口気にか
かげ口を言わねば淋しい人とな
かげ口を帰れば妻から姑から
かげ口でできた指輪の光ること
かげ口の最中本人今晩は
かげ口を知らず栄転見送られ
かげ口もお世辞も同じ口で言
かげ口をまたかかすハイヒール
繰り返すかげ口どうやら裏があ
面白う聞かせたかげ口悪びれず
ためにするかげ口だとは露知ら
かげ口が尾に鰭付けて戻って来
円満な家庭かげ口こわしに来
かげ口が聞えるように手を回し
居合せてかげ口言うたことにされ

李朋 勝子 白汀 百酒 晃男 季賛 素身郎 惠二朗 弘朗 清泉 秋月 春己 孝華 千久良 芳子 保夫 秋月 瑞枝 木魚 隆子 正朗 春雄 露声 礎山 初甫 七面山 どんたく 祥月 庸佑 愛鳩

男

小西無鬼選

かげ口に負けてなるかと母子家庭
 楽しそにかげ口こわい人と知り
 佳 かげ口を言うひまあれば儲けます
 千代 かげ口に負けず信念押し通し
 明子 かげ口を聞くからこんな事になり
 秋星 かげ口がばれて女子寮一ぱらん
 不水 かげ口をいぢも知らせに来て困り
 静水 かげ口を言つてかげ口気にしてい
 みや子 かげ口の通りにうごいて来たら
 古方 かげ口はまんざらでない妻と聞き
 千翁 かげ口へもう恐妻も取り合わず
 軸 天

捜査線藤の男が浮いてくる
 借りられる時だけ男と見込まれる
 末っ子も男になれと街へ出し
 荒海を越えて男の歌があり
 ハシゴ酒男婦宅をかばい合い
 清貧を身上妻に苦勞させ
 乗りかけた船だと男へん意地
 男かと云われ洪々向き直り
 男性の魅力きちんとタイを締め
 昭和基地日本男子ここにあり
 きつちり着て男は夏に弱きほれる
 山男今日うぐいすに聞きほれる
 妥協案蹴つて男の意地を悔い
 胎動は男産着の手がはずみ
 三昧の音きけば男の撥さばき
 浪人のそれでも男の意地を張り
 ままごとの父先ずひげをそり
 かつら脱れば男に還える楽屋口
 酔えばすぐ軍歌を唄うのも男
 男尊の国に生れていて敷かれ
 男では言えぬと妻の口を借り
 ポンと肩たたいて男だ明日がある
 頼りない男立派な髭を立て
 レディファースト同権へ男瘦
 花一つ男世帯に寒椿
 毒舌がシゲキで男立直り
 叱つても叱り甲斐あり男の子
 男なら唇盗んでみたらどう
 佳 魚市場男の意気で朝が明け
 詫びているさすが男だ泣いている
 庸 野迷路
 佐 野迷路
 一 野迷路
 保 野迷路
 雅 野迷路
 千 野迷路
 痴 野迷路
 章 野迷路
 保 野迷路
 夫 野迷路
 藤 野迷路
 波 野迷路
 雄 野迷路
 弘 野迷路
 涼 野迷路
 不 野迷路
 三 野迷路
 清 野迷路
 泉 野迷路
 千 野迷路
 久 野迷路
 良 野迷路
 秋 野迷路
 月 野迷路
 惠 野迷路
 二 野迷路
 朗 野迷路
 砂 野迷路
 生 野迷路
 王 野迷路
 紫 野迷路
 十 野迷路
 九 野迷路
 平 野迷路
 凡 野迷路
 九 野迷路
 郎 野迷路
 旭 野迷路
 峰 野迷路
 鎮 野迷路
 山 野迷路
 礎 野迷路
 七 野迷路
 面 野迷路
 山 野迷路
 佳 野迷路
 女 野迷路
 千 野迷路
 翁 野迷路





ココロ
便 箋

ヒゲ面が莞爾と宇宙から帰り
 呼び電話せきも慌てもせぬ男
 北浜へ男を賭けた靴の音
 嫁がす日男の涙チラと見せ
 ぶつきら棒な男あれでも気を使
 五十一年男の意地もひからびる
 家出れば男優しいことが云え
 何かしら耐える力をもつ男
 何かしら耐える力をもつ男

天

地

人

瑞枝

春巳

芳子

代仕男

・作句教室・

研究題 「味」



清水白柳

家庭科の味はグラムで出来上り

学校で習うた味の水臭し

酔夢 金三

テレビ料理を見ていると、塩小さじ一杯、砂糖大さじ何杯と言うように教えているが学校では塩何グラム、砂糖何グラムと教えるのだから。それがどんな味になるのかは知らない。恐らく水臭いだろうと作者は思ったのだ。授かった味を殺してまでいため

白汀

天然の味を生かすということとは余り手を加えないで食べるということなのだが、何でもかでもジュージューと油でいためられては、とてもかなわぬ。それを詠んだのだ。

妻の留守男の味にした夕餉

共稼ぎ先に帰った方の味

秋月 保夫

男の味という語はよかったと思う。それがインスタントであってもいい、塩辛らくてもいいのだ。共稼ぎであれば材料は奥さんの方が揃えているのだから味はそんなに変わらないのだが、匂の底に温か味がある。

飯盒で炊けば野戦の味に似る

水の美しい溪谷での飯盒炊きさんのだがフ

文平

ッと頭の中をかすめるのが野戦の思い出だ。

快調な身体空気にこんな味

要次

空気のうまさは都会をはなれるとよく判る。ことに身体の調子のよい時は特にそうだ

ごくごく汗も拭かずに飲む旨さ

万竿

ラッパ飲みコッラがうまい勝ゲーム 照一

汗も拭かずにのめは勝ゲームという具体的な味があるのだ。佳句になったのだ。

快復期煙草の味をたずねられ

美舟

蒼空へ煙草を吹いたヘルメット

政二郎

風邪をひいても煙草の味がかかるものなのだ。そこをねらったのが初めの句である。

ヘルメットの匂は現場の風景であろう。

ふるさとの味ダンボールで運んで来

露芳

ふるさとという着想が面白いと思ったのだ。暇と金なけりやと思う味行脚

千久良

うまいもの食べ歩きといううなことは金と暇がなければ出来ないことだ。羨しいと思うのは作者だけではない。

駅弁の味とチビチビ独り旅
チビチビやり乍ら句帖でも開いている作者の姿が目に見えるようだ。

季賛

晩酌のあとの皿もいただけ
こうした夫を持つ家庭の和やかな夕餉を想像することが出来る。俵が満ちている。

雄声

きき酒は勿体なくも吐き出され
いじましい話だが作者は勿体ないと思ったのだ。

滋雀

酔うまでは味を知って鍋料理
下戸の私には想像の他ないのだがこの句のようではないかと思う。

濁水

肉と煮きまった味に煮えつまり
肉の味借りてこんにやくほめられる

三水

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

不水

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

肉の味借りてこんにやくほめられる
肉の味借りてこんにやくほめられる

塩煎餅日本の味の音で食べ

流路

作者はカルフォルニアに住んで居られる柳人である。それだけに塩せんべいの歯ざわりと音と故国日本へのなつかしさを感ぜられるのだろうと思った。

パン焼いて一人で味気ないコーヒ

痴亭

コーヒの苦味に朝を引締める
パンを焼き乍らのインスタントコーヒでは味気ないのも当然であろう。コーヒの苦味の句は朝を引締めるという立派な句語によって成功している。この句の作者はハワイの柳人でこの句の外に

ラウラウも五本箸では味が落ち

紅溪

というのがある。このラウラウというのは布哇土人料理であると註がついている。うまい料理でも五本箸、つまり手づかみでは味が落ちるというのだ。こうした句は一般向とは言えないが御紹介して置く。

味知って赤ちやん首を横にふり

源川

味つけのいらぬ母乳でよく育ち

芳子

味をしめ顔をうずめて呑むお乳

晃

ものは言えなくても味をよく知っているのが赤ん坊だ。首を横に振ったのはよほど不味いものだったに違いない。母乳の句はその通りだが、あまりにも素直すぎて句に生彩がないのが惜しい。顔をうずめての句にも同じことが言えると思う。

味よりも量でこなし子達は違者

南天

味つける間が子供等に待てず

緑朗

味はめずあつという間に平けて

千夏

だが中の句の子供等に待てずという句語がよく生かされていると思った。
茄子の色其ま一夜漬の味
漬物の石が効いてる塩加減
ほめられて漬物桶が底をつき
御馳走のあとは茶漬といった味
一夜漬の色と味は年配のものにとって大きな魅力である。どんな料理を頂くよりも御我慢の漬物でお茶漬を招んでほしいと思うのである。若い人で漬物嫌いもあるようだがこれも世代の差かも知れない。
味加減ほめればいつも同じもの
うっかりと味をほめたらそれ許り
後の句のうっかりと、という五文字に句が生かされている。そこに作者の年輪を見ることが出来ると思う。
もといれて味は母のに及ばない
嫁いても姉の手料理母の味
科学調味料をたくさん使っても砂糖を使っても自然の甘味は出てこないものだ。そこを初めの句は詠んでいる。後の句は姉の料理に母の味わいを感じたというのである。作者の純情がよい。
姑の味いつか覚えて無事な日日
孫出来る頃から嫁の味に馴れ
インスタント姑の舌をだまし得ず
初めの句は嫁の立場から詠んだのである、いつか覚えてという、素直さがいいと思う。
次の句は姑の立場である。嫁の味に馴れてゆこうとする平和が感じられる。姑の舌の句はその底に何か不安なものを含んでいるように

ある。

新妻がもう呑みこんだ家の味
それぞれの味ありてよし家平和

千代

その家には家としての味があることは言うまでもない。その味にわけこむことも大切ではあるが、またそれぞれの持味を生かすことも大切である。この二句はそれを詠んでいる

味付けは板についたが倦怠期
女房に言われ慌てて味をほめ

千梢

中年の家庭をうがった句である。それぞれの句に面白さがあると思った。
味かげん風邪の床まで持つて行き
味加減風呂の窓から娘に教え

花子

味かげん風邪の床まで持つて行き

与志

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

二句共通確な描写で成功している佳句である。風邪の床まで、風呂の窓から、という七文字にすべての情景があらわされているのであって申し分のない表現といえる。

うなずいてひとりなめてる味加減 松風

味見して何か足りない妻の留守 砂生

味見したカレーライスにとび上り 李羅

最初の句はうなずいてというのがよかったと思う。そこにはまめまめしい妻の姿がある。次の句の何か足りないというのも面白い。そこらをかきまわしているのであろう。カレーの句にはユーモアがあつて成功している。

お味見をなどと上手に勧められ 亜也

味ききという特権に集まる腫 都

お毒味と気安い友のつまみ食い 美代

嫌いなものでも勧め上手にはかなわないというのが初めの句である。次の句の特権というの面白い見方である。羨しそうな腫がか

がやいているのだ。親しい友達に遠慮のないもので毒味して上げるといい乍らどしどしまんでいるのである。面白い句になっている

お見合いて何を食べたか覚えて 生仏

純情さもないが本当かいなという句である

インスタント自然の味を忘れさせ 柳恵

恐ろしい事である。こんな事が続くと大変だと思ふ。

姉の店今日も試食と食べに行き 幸子

作者は入院中なので試食というのが生きて

使う方がいかだうか考えて見たい。結構なお味ですわと上わ目して 静観堂

上目を使ったところに諷刺があるのだがもう少し叙法を考えたい。

齢すでに番茶の味に居る夫婦 安彦

淡淡々とした句であるが、深い味わいを持つているので共感がある。

市場籠味見だけしてサツと去に 正朗

街の出来事のスケッチであるが浅いと思う

野莓の味此処にあり幼なき日 紫

感傷だけの句は悪いとは言わないがそれだ

けの句に終ることが多いと思う。

お通夜に誰もほめない特級酒 春雄

薩膳へ生前通りの味加減 与志

この二句にはうがちがあるとと思った。最後に人間関係の味の句を見よう。

味のある言葉かみしめ月の道 章雅

余程気に入った言葉だったのだらうと思う

後味が良くて未練がまだ残り 弘

後味の悪い別れが多いものだが、後味の良

い別れは未練が残るのも無理はない。

言葉一つ足らずに味気ない別れ 明子

もう一言と言えよと言えよと後で思っ

たのだがもうおおというところ。

刀工の精魂切味など言わす 繁太郎

現在の刀工は切れ味よりも姿に重きを置いて

いるのではないだらうか。

味な真似して叩かれる平社員 釣月

会社の上司であれば味なことをしても誰れ

も言われないが平社員だと吊し上げをくうこ

もあるだらう。それを詠んだのだ。今月は一

色紙短冊
書画用品

大友成しあ

丹室月堂

電報セニセニ

句ずつ採り上げたので同じ着想の句でもっと佳句があつたが作者別に選んだので御了承願いたいと思う。

さてあと一回で小松園氏と交替するのだが小松園氏は初歩の指導に重点を置きたいと言つて居られるので、投句は同人で選者級の方には御遠慮願いたいと思うので何分の御協力をお願いしたい。

九月号発表・締切七月二十日

研究題「引く」 五句以内

十月号発表・八月二十日

研究題「思 想」 五句以内

宛先 大阪市阿倍野区王子町三丁目三四

菊沢小松園

高野山詣

大阪市 橋 本 緑 雨

高野山歩いて詣つた事を思いだし
分譲地売つた値段おしく言い
信仰の鐘が鳴ってる日曜日

長野県 高 峰 柳 児

転校の子が巻添いの左遷なり
ホームバー補給が絶えている埃り
共稼ぎ産む計画にきりかえる

松山市 月 原 宵 明

気安めに今日の運勢読んで出る
桐の葉はマンシヨンと言う雨蛙
覆面が出そうな城の追手門

大洲市 米 沢 曉 明

シャッター切るだけの水着が岩に立ち
上座から胡坐をかいだ和やかさ
自炊今日一人で食べるに惜しい味

和歌山市 秋 月 宏 方

カタカナで書かれて辞書のいる時世
勝った日の名人笑顔うつされる
百坪の土地に愛の巣建てた夢

小松市 山 上 千 太 郎

老後の設計いろいろとく違い
急用のように單車でパチンコへ
小中高 予備校卒業して終り



黒潮おどる

紀州路へ

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行第2きのくに……………(毎日)……………12時45分発
急行南紀3号……………(毎日)……………16時40分発
急行臨時しらほ……………(土曜)……………13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行南紀1号……………(毎日)……………7時45分発
夜行直通列車……………(毎日)……………22時07分発
●第2きのくに号は座席指券を1週間前から発売
●他の列車は座席整理券をなんば駅で発売します

お問合せ・南海交通社
(641)8686・(341)5038
(361)3126・(716)8661

南海電車

昭和四十一年七月現在

川柳塔社同人

磯石石石石石井池池安安阿天尼阿麻浅浅青青
島坂倉川居井阪田田藤平萬見部生野川山木
三新旅侃高夏東泉古弘桂幸之柳ア芳八慶遊
石雪風洞志生紅水心道仙的助太ト朗郎之助星

牛宇魚植植上上岩岩今井碑伊伊和出市市伊磯
島佐住山村林田田田西上藤藤泉松直場岡丹野
水彰満武客加翠美併章湧弓茶泉陸風奇曉阿与
京大潮助子仙光代吞雅三彦仏睦奇舟喜良志

小太太小大大奧奧置隱小小小岡大岡江梅有白
田田田沢崎坂村谷田岐川笠田江嶋国田働井
垣良湖史博形丹弘ふ不恒靜青彰秋芳幽久芳三
蝸牛平葉正水路朗じ醉明堂女男月道谷雄仙坊

菊神冠川川河河河川川川河河唐賀神金葛笠大大小小小大大越大大
田原端村村村村竹口岡井相崎本谷井城原山森浜畑西鶴智谷
い幸士東雲好瑞日みの松弘雪庸す、翁昇凡文伊吸雅娛牧自由八喜一月
さ兒朗樓郎川満る風生子佑む昇郎秋郎江城樂人朗歩由水都

小小小後高小小工桑黒蔵久国草木木木木木木木北橋北黄岸菊
松西西藤津谷池藤原川本白奈良米弘深山山山村村村村村村高川瀬南小松園
義雄無梅徹仙しげ甲喜紫梅子休升路二遠涼匡平千容悟歩風巢秋柳
雄々鬼志也山お吉風香子

高傍関杉楳新洪城清清水島島直佐佐佐桜坂酒酒近小小小小児
木島戸原川谷谷水水田居原野野々川田田井藤林林林島島与
桃静宗愛一博三義白一破百七面白卜福不東清ひ凡孤トメ孝無呂
里馬郎鳩善也時舟介柳保竹酒山白水占郎水洋男子平生二子正聖志

仲内戸友富都戸遠天寺辻辻辻築津田谷田田田田竹竹高高高田
と藤田淵岡倉山正田川山秋村沢中中中中本内橋橋崎垣
んき古貴淡求普可千花喜白圭快夢六藤好万十狂蛙素圭操尚雄方
たさ方山舟女天住梢宵仙溪水起花波祐里方二眠空三子史声大

西村句楽坊	西辻竹青	西岡洛醉	西尾青一路	西尾いわを	西松東岸	永藤弥平	永藤文庫	長野井蛙	長野鶴丸	柳谷光郎	那島生々庵	中島小石	中尾滋断	永尾滋雀	中川晃男	中村ゆきを	中村九呂平
浜野奇童	浜田久米雄	羽原静歩	服部十九平	長谷川三司	橋本緑雨	野田素身郎	野田一念	野呂鷗汀	野本吞水	野村岬月	野々口美舟	野田紅雨	奴田原一栄	西出柳宏子	西垣錦風	西森花村	西垣花村
平田三十郎	平田実男	平尾大希志	平井井平	菱田満秋	久家代仕男	樋口舟遊	馬場魚山	馬場夢生	長谷沢義英	羽佐間柳葉	原独仙	原千魁	林昌光	林夢虹	林葵丘	早川清生	浜川胡蝶

新同人紹介

大阪市南区西櫓町二二

脇田

薫風・生々庵推薦

兵庫県多紀郡丹南町野中五二二

磯野

無鬼、白柳推薦

松塚美知代 松川たつみ 松岡委瀟浪 松江梅里 正本水客 本多柳志 本田惠二朗 本多清人 本庄金三 細呂木魯木 古川魔花麗 舟木与根一 布施築川 藤原秋月 藤村ゞ女 藤本礎山 不二田一三夫 藤岡花梢 藤井明朗 福田多可志 福島正則 福井鉄児 福井多蘭子 福井野迷路 弘津柳慶 平野尤三

山内阿茶 山内静水 柳生 八木摩天郎 森本法泉子 森田布堂 森下茗人 森愛論 森川すみれ 室谷鉄舟 室井八九寸 村山光輪 村田飄太 村上旭童 三輪双楽 宮地峰円 宮口笙 宮川珠笑 水谷あいき 宮尾ただし 満田陽子 光好陽夢 三井醉山 間生青丹子 丸川初甫 松田半月 松本吉太郎



マイペースで飲もう

アサヒ
スタニー

若林草右 米虫一乃字 吉原紅月 吉田圭井堂 吉岡美房 横山立声 山本素児郎

渡辺乱坊 渡辺独歩 渡田曉童 脇田潮勇 若柳多志 若本あき坊 山田季賛郎

第百八十二回 (新年第十回目)

大 萬 川 柳

「 壺 」

入選発表

選 者 清水白柳
投句総数 六百十七句
入 選 四百十五句

壺抱いて暴君だったが悔い多く

長島 志賀夫

朱の壺を裸婦に抱かせて構図とす

宇部実男

コレクション壺から石にかわり

島根 正朗

火消し壺火事も親爺も明治調

島取 秋星

この部屋のムードは壺のある余白

岡山 文平

壺掘り出して民族の歴史訊く

笠岡 要次

壺いっぱい貯めて勘定してみたし

大阪 明子

台所改造邪魔な火消し壺

大阪 弓彦

連想飛躍主人と壺の細い首

大阪 水客

ラグビーのように百万両の壺

東京 泰造

ぬか漬けも壺で間に合う新世帯

堺 圭井堂

和歌山 木魚
梅干の壺もそろそろ邪魔になり

泉北 好郎

ほめとけば間違ひなからう釜茶壺

南河内 吸江

飲み水の壺をあたまたにひよこ乗せ

大阪 痴亭

口欠けた壺をガラスの外で見せ

大阪 没食子

指染めて母丹精に梅を漬け

大阪 恵二朗

お骨壺泣いて詫びてももう遅い

大阪 可住

忌が明けて寺へ骨壺預けとき

大阪 可住

梅干の壺年別の紙を貼り

大阪 可住

ふすま絵も壺床の間も壺だらけ

大阪 可住

たこ壺を發明したのも日本人

大阪 可住

つば抱いて人を信じぬ眼が光り

大阪 可住

たこ壺のままつぶされた敗け戦さ

大阪 可住

七月の句会

玉造川柳会

題時 十一日(月)午後六時
外人・レンズ・滝
玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

南大阪川柳会

題時 二十日(水)午後六時
貝殻・打算・公務員・脱ぐ
アベノ松崎町三ノ一〇
大 萬

南海川柳句会

題時 二十一日(木)
レーシングカー・
とほける・教育ママ
ナンバ高架下新和クラブ

窓口に濡れたままなるインク壺

岡山 藤波

滝壺に化身の如く行者佇つ

岡山 秋月

煙りでも出そうな壺を覗き込み

大阪 集一

壺出たらコブラもう踊らず

大阪 集一

墨壺にしめりをくれてから無口

玉島 旭峯

天ノ句

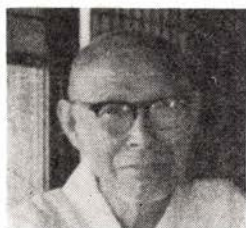
壺ばかり愛して人に愛されず

選者吟
壺曲尺に長け清貧に甘んじる
大萬川柳ベストテン
(六月現在)

一	水客	二六	五	大	阪
二	梅里	二二	五	大	阪
三	柳志	二二	五	大	阪
四	吸江	二二	五	大	阪
五	好郎	一八	五	泉	北
六	清人	一七	五	布	施
七	美房	一六	五	富	田
八	可住	一五	五	篠	山
九	恵二	一四	五	児	島
一〇	万竿	一四	五	松	原
一一	木魚	一四	五	和	歌
一二	痴亭	一四	五	大	阪

雅号ぶっちやげばなし

くらくほう



にしむら

西村 句楽坊

(17) 若い頃だった、俳句を少しひねったところ、先年病気で伏せていた時「川柳雑誌」を投込んで行つた人があつた。くり返し読んで見ると、肩のこらない軽い気分、地位や名誉や職業にとらわれず、銅金御殿の日那でも、棟割長家の八公でも、誰に遠慮も気兼ねもなしに十七文字の短文詩にして表現発表が出来てみな平等。それからその魅力にとらわれて作句投句を始めた。これがまた活字になつた。雅号がある、さて先生方や先輩諸氏の句を噛みしめてみると仏心仏語の味がにじんでくる。句も又楽しからず哉、と思つたままを号にして句楽坊と名のりま

七十八才の老僧

一三	桃里	二二	五	笠	岡
一四	阿茶	二二	五	大	阪
一五	凡茶	二二	五	奈	良
一六	没食子	二二	五	大	阪
一七	きさ子	二二	五	岸	和
一八	宗太郎	二二	五	大	阪
一九	形水	二二	五	大	阪
二〇	明子	一〇	五	大	阪

以下畧

次ぎの兼題「夕刊」五句以内

締切 七月二十五日

発表 八月二十日

八月の兼題「ダブル」五句以内

締切 八月二十五日

発表 九月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町

句集 ひとりの道

佐藤 正 敏 著

三ノ一〇
大萬川柳会

単純に生きられる顔ガムを噛み
蹠蹴する
いくたびを身の置きどころ
風邪に寝て何時から濃き初老感
苦笑していやでも齢に
突きあたり
著者が蹠の中で「若い頃の句に

は自分としての思い出もあり、愛
着もあるのだが、殆んどは今日見
るに耐えない。しかしそんな中か
ら、ともかく最近のものと併せて
ひろつたのがこれである」とけん
そんなで書いて居られるが仲々ど
うして立派なものである。関東風
な調子の中に著者の心を知ること
が出来るので一読をおすすめした
い句集である。(白柳)

箱入美本 B6版

一九二頁 五〇〇円

序文 川上三太郎

発行所 東京都台東区入谷町

二〇三

川柳研究社

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 661 三四五二 一四
夜間 661 四四〇八

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

☆七月は故麻生路郎先生の誕生日(十日)と命日(七日)の月である。偉大な一人柳人の思い出、印象は各人それぞれに抱いておられることであらう。それを力として川柳界のために精進をお願いする。私としては不朽洞へ初めてお伺いした時に「ご教示戴いた「川柳と一口では云い難いが、十七音字を中心とした批判詩である」とのお言葉が忘れられない。十日午前十時から天王寺美術館横の慶沢園での路郎忌川柳大会には一人でも多くの柳人が参集しよう、盛大な会にして下さるようお願いします。

☆川柳「紋土」の五月巻頭言で片山巷雨氏は「久米南町は文化の町と言われている。しかし隣接町村と較べると文化的と言われるものが多い訳ではない。文化施設、文化住宅、文化財等漸次増加していることは他町村においても同様である。強い言葉は弓削川柳社が二十年近くも存続して川柳による町作り、いわゆる川柳町活動が続けていることであらう。この一事によって文化町の名を頂戴しているのであれば我々川柳人の責任は極めて重大である。中略、先日町議選などを見ると、文化の匂いなど全く影をひそめて、情実供応の旧態依然たるものであった。明治以来百年、文明開化を標榜し、戦後二十年文化国家を目指して来た我が国の文化の実態を見せつけられた思いである。文化町とは久米南町に冠せられた美称ではなく、弓削川柳社に背負われた十字架にはかならない」と。弓削には路郎先生の「俺に似よ俺

に似るなと子を思い」の句碑がある「人間陶治の詩」と喝破された先生を思わずにはいられない。

麗筆をふるわれ川柳家にもおなじみの方である。なお生々庵、小石主幹ご夫妻も同展に出品された。

☆昭和四十年(第一回)北上賞受賞者は小石漫歩氏と発表された「農民が政治を言えは愚痴となる」作者は松島の瑞巖寺で修業中の若き僧侶、尚一層の精進を期す。

☆故岸本水府氏(大阪府)に春の叙位叙勲に際し銀杯で下賜された。ひとり番傘だけでなく日本柳壇のためにもその意義は大きく共によるこびたい。

☆第十回記念岩手県川柳大会は六月二十六日(日)午前十時から北上市民会館で開催。

☆東宮の柳社へ二度、岡山、中国ブロック会議への出席など多忙な日を送っているが、そのうちに長野井蛙氏にお会いしたいとの中川柳会を指導されていた柳慶氏の栄転(防府試験場管理課長)送別句会を会員諸氏が催された。「一気心が溶け合う頃にもうお別れ」露声はか。

☆麻生霞乃女史(奈良県)は六月二日本社へわざわざ柳翁の肖像を届けてくださった。柳翁忌句会で皆さんご承知のもだが、こんど本社で保管することになった。生駒まで編集部の一三夫氏がお送りしたが、生々庵、小石主幹ご夫妻とも久しぶりのご対面だった。

☆函館川柳社創立五十周年記念北海道川柳大会は八月十四日(日)正午から函館市護国神社々務所(予定)で開催。

☆直原玉青氏(大阪府)指導の青鈴社余技日本画展が六月七日から十二日まで阪急百貨店の八階催し場で開かれ連日盛況であった。玉青先生は本紙表紙に毎号

☆故大谷五花村「句碑まつり」は五月十五日午前十一時から白河市南湖神社々務

☆西尾葉氏(八尾市)は六月二十二日、神戸市平野の祇園神社で開催された三条東洋樹選暦句碑建立記念句会へ川柳塔社の代表として出席された。

☆吉田圭井堂氏(堺市)は五月十四日から道後一高知へ三泊四日の旅を楽しまれた。

☆渡辺曉童氏(愛媛県)は五月十五日附お便り「静岡市での全国広報研究大会のあとでチャッキリ節の歌の踊りの指導に出席されたがなんと川柳の大家榎田竹林先生でした。白い長髪羽織袴の元氣なお姿でした。表彰状を土産に伊豆スカイライン見学、またまたせわしい仕事の待つ郷土へ落付きました。

☆辻白溪子(大阪府)山田季賛(高槻市)の両氏は交通安山陰川柳大会(五月十五日倉吉福祉会館)へ同

所で。
☆汐風川柳社(今治市)の顧問月原宵明、会長長野文庫両氏の句碑が建立されることになった。今治市には初めて川柳句碑なので、建設委員長の水子映月氏はじめ委員の越智一水氏等は大いに張切っておられる。
☆西尾葉氏(八尾市)は六月二十二日、神戸市平野の祇園神社で開催された三条東洋樹選暦句碑建立記念句会へ川柳塔社の代表として出席された。

行、永尾永断氏（兵庫県）

は列車に乗り遅れて単独行
☆橋本緑雨氏（大阪市）は
最近目を悪くされ句を書く
のにも眼鏡の厄介になっ
ていると

☆白井三井坊氏（玉島市）
から「六月に『川柳たまし
ま』百号記念句会を致しま
すからよろしく。」

☆山川阿茶さん（大阪市）
が四十代としか見えないう
に古稀を迎えられたとは驚
きである。古稀祝吟を多数
の柳友から頂き、私は一人
ぼっちでも幸福だとしみじ
みと感じておりますと寄信
された。

☆河本南牛史氏（松山市）
の川柳句碑が同地椿神社々
頭に四月十日建立した。一
恵栄もなもしお椿まいり道
後の湯。

☆山内静水氏（竹原市）は

川柳「ながや」句集

第十二集が昭和四十八年四月二十九日印刷発行
された。昭和二十八年から四十年に至る約二年
間の店子二十三名の寄り合い（句会）「吟千六百
句が中心となっていて、町ことばの句集」と
題する川上三太郎氏の序文がある

塩蛙が好きなたった叙熱の日
トゲ刺して近く嫁に娘が叱られる

発行所 東京都中央区越前堀二ノ八、東都
川柳長屋 運 定価二百円 送料四十円

☆羽原静歩氏（守口市）は

四月公職を退き美育学園理
事長として、宇治市の「か
おり幼稚園」守口市の「寺
方幼稚園」に就任された。

☆江国幽園氏（岡山市）は
多趣味で知られているが、
最近では胃の調子を良くする
ため旭川で鮎やいなを釣る
ことに専念、先日は珍しく
虹マスの一尾釣れたので大
喜びとされた「二尾とは釣
れない」ところに糸を垂れ

☆奥津啓一朗氏（東京都）は
五月二十六日問屋の招待
で伊東温泉に遊ばれた「俗
の垢流しきれないまま戻り
引続き金峰山修験本宗行者
として法燈を護りながら、
靖詩に余生を送る心持でい
られる。

☆山内静水氏（竹原市）は

五月八日第五回西条川柳大
会へ。同行の竹原川柳会員
学生十名一般十二名のうち
一、三、四、五、六位の賞
を独占、二十位までに計八
名の入賞者を得て意気大に
に挙げた由。山田季賛氏
☆石坂新雪氏（米子市）は
四月十日、子息の大学入学
式に京都へ出向かれたので
本社を訪問されおつりし
であったが、式が延引した
ので予定を変更された。ま
たの機会にどうぞ。

☆国弘平休氏（下関市）は
七月の路郎忌川柳大会は令
息のご結婚問題などで参加
できないが、小野田川柳会
で一杯水や宇部の五平太な
どで路郎先生を偲ぶ句会を
準備中とのこと、なお購読
者増加にお骨折りをいただ
き感謝申しあげている。

☆服部十九平氏（岡山県）
は森戸辰男氏を会長とする
百働会という老人の会の団
体旅行で隠岐へ行かれ、史
蹟と風景と唄と伝説に長生
きの薬に合った。七月十
日の路郎忌川柳大会を楽し
みにしておられる。

☆川端柳氏（東京都）は
学生時代「川柳雑誌」で勉
強され、今は「川柳初篇

研究」に故郷三味氏にかわ
って原稿整理されている。

☆不二田一三夫氏（大阪市）
は数紙の新聞で報じられた
ようにこんど誕生した「漫
才作家くらぶ（秋田実氏会
長）」のメンバーとして、
民放や劇場の台本も書くこ
とになり、うれしい悲鳴を
あげておられる。

☆久米奈良子さん（布施市）
は布施市小阪三八四の一
へ転居。書道塾は旧住所の
由。

☆前田喜代人氏（下関市）
の住居番号が変更になった
下関市入江町五番二二二号。
☆小川静観堂氏（伊丹市）
の住所は伊丹市春日丘町四
丁目五三に変更になった。

☆森本黒天子氏（河内長野
市）の新住所名は、大阪府
河内長野市栄町六番二二二
☆函館 川柳社

北海道川柳大会
創立50周年記念
日 八月十四日・正午
会 場 函館市青柳町・護
国神社社務所
宿 題 「むかしむかし」
川上三太郎選
「善意」村田 周魚選
「力瘤」直江 武骨選
「勢揃い」佐藤寛漢選
「代償」越郷 黙朗選

「四方八方」
北村白眼子選
「鐘」鈴木 青柳選
席 題 四題当日・二時締
切 投句締切・6月30
★宿題 投句のみは百円同
会 費 封出席者は二百円
★賞多数、全参加者に北村
白眼子先生榮筆手
★投句先 函館市青柳町十
八番十一号
函館川柳社

疲れ 肩こり 食欲不振 つかれ目 神経痛に

▲多々々薬品

アリナミンA

本社六月旬会

会場 自安寺

41・6・6午後六時

例によって与呂志さんが定刻一時間前には
いて準備。これが毎月だから頭がさがる。
なかなか出来ることではない。

さすがに六月ともなればすこし汗はむ会場
である。多久志氏の柳語は「いのちある句」
を骨子に、路郎先生はじめ大家の名句を語り
深い感銘を与えられ、柳道にいそしむようさ
げられた。

岡田某人氏の16句、福島鉄児氏の57句、入選
数においてこれだけのひらきがあるところに
川柳のむかしさがある。昭三氏の優秀二句
が注目をおびた。九時閉会。(河井庸佑整理)
出席 与呂志・一三夫・凡九郎・弓彦・ま
しを・誓二・双葉・操子・某人・一彦・加仙
・甘草・白柳・静馬・白溪子・柳宏子・文秋
・狂三・露芳・すゝむ・春己・生々庵・八郎
・昭三・清人・好郎・柳志・水客・鳥荘・一
舟・滋雀・痴亭・たつみ・かつら・吸江・一
多久志・潮花・梅里・古方・醉升・形水・一
扇・舟遊・良夫・トメ子・専翁・柳太・金三
・句坊坊・有子・庸佑・千梢・天樹・鉄児・
あいき・季賛・完二・菁風・葉子

席題「胸」

海士天樹選

孫に胸一つ叩かれ付いて出る 葉子
シンボルは平和と鳩が胸を張り 文秋
胸を打つ善意の記事に朝を出る すゝむ

胸いたむ話は花を活けながら
我が胸に聞けと無言の意見する
胸抱いて少女は星に祈ること
胸のすくような話した飲むとしよう
胸スツとする程言うてからの酔い
我が胸の炎に似たりまんじゆしやけ
熱章が胸にフアイトを出す余生
妻の座を外して泣ける母の胸
一生を托す男の厚い胸
聴診器胸の隆起へ遠慮せず
胸の火をのぞかせないとマダムが目
胸の中打ちあけ合っているはしご酒
君ゆえに胸が痛むと書けという
胸張って歩こう定年近くとも
空白の日記へ胸が痛み出し
胸板に男がひそむタバコ消す

席題「ギョーザ」

河相すゝむ選

一べんは話の種に食うギョーザ
幸か不幸かギョーザを未だ食わず
ギョーザなど更らさら香かいただけ
古いと言われギョーザをたべてみる
食ってみようまいとギョーザ臭い息
精がつきませとギョーザもめられ
パートナギョーザ食べたすぐわかれ
ギョーザ食うた口を女房に嫌われる
料理のギョーザ二ツク利きする
ミンチのギョーザはすぶられて食べ
子の箸に嫌らわれているギョーザ
残業へいたため直しているギョーザ
焼き乍ら食べるギョーザの別の味
スミ子ギョーザにたえる暮し向き
物判り良くてギョーザの好きな母
新婚の妻もギョーザ党になり
焼キョーザ釜んだままで皿へ載り

水子客
操子夫
酔己升
春人己
あいき
舟遊
鉄児
鉄児
柳宏子
柳志郎
柳好太郎
天樹

鉄馬児
静子
操子
柳太夫
一三夫
一三夫
古方
鉄志
古方
滋雀
潮花
潮花
生々庵
痴亭
柳太
白溪子

あの顔でギョーザ食べたとは受取れず
今日からはラーメンギョーザに変えて
南無猫吉ギョーザの方がおどろいた
デトやレ言うのにギョーザ食へては
何とぞ言いつつギョーザ食へては
ギョーザ食うおんなギョーザ太り肉
女医さんにかいたギョーザの口を開け
特製とかいたギョーザの小さいこと
ギョーザ焼けるまでの老酒でうまが合
焼キョーザビールは一本だけで足り
来客へギョーザのように子はならび
他愛ないおしやべりギョーザにおつて

席題「口笛」

岡田某人選

口笛も吹けぬ歯並みに老を知り
口笛も吹いてインデヤン遊びする
やけくそで吹く口笛と母は知り
口笛が麦の匂へ乗って来る
口笛で海女の若さが知らされる
彼女呼ぶ口笛なのに犬が来る
口笛がやんできれいな空をほめ
スタンドの不満口笛喧しい
口笛のサイン通せず逢いそびれ
口笛も春青春に悔は来ない
共学の娘口笛ふいて来る
口笛がリズムに乗った楽しい日
口笛のまばらになったとうげ道
合格とわかる口笛帰って来
口笛も出て工場道の中止
口笛がカスレ夜道の渉らず
口笛は低くわが家が近くなり

兼題「マイベイス」

清水白柳選

週一度密で胃腸もマイベイス
マイベイス損得ぬきの趣味があり
嫁き遅れ変な処でマイベイス

睦夫
干夏
与呂志

誓郎二
好方
古秋
文馬
静客
水客
水客
白溪
一栄
すゝむ
多彦
弓彦
一栄
あい
あい
たつ
柳宏
痴亭
春遊
滋雀
一舟
操子
静馬
某馬
人

— 57 —

鉄線を延ばす職にて食べて行け
 算目の線が浮いてる京の庭
 ウインドの裕衣素足へのびる線
 のりきいた裕衣が添わぬ肩の線
 棚上げの線でももっている整理
 ふる里へ帰る線路はもういらす
 年輪は男踊りの線となり
 譲り合いてたら線が自然に出
 ええ線を言うぜと十代こまやぐ
 航空路世界の平和つなぐ線
 香具師引いた線へ立つたはさくら
 こまでと線引いておく酔心地
 線と線つなぎ立ち退き迫られる
 平行線だつたままでもつれて来
 地平線バイバイと陽は沈む
 線越さぬ仲と他人は見てくれず
 非常線デイトばかり引くかかり
 足拍子おんどの線になつて
 スコッチのビンへ今日飲む線をひき
 貸したくはない伏線に気がつかず
 ふるさとへつづく線路で吐息する
 舌出してから訂正の線を引く
 着流しの線が気になる下合せ

兼題「架空」

松江梅里選

一白柳好白舟一白舟好柳遊郎子太
 潮昭鉄柳完水痴一阿誓柳季一天梅一白舟好柳遊郎子太
 花三兄志二客亭舟茶二太賛榮樹里舟柳遊郎子太

時代劇カメラに邪魔な架空線
 炭積んで架空索道動いてる
 社用には架空の客をつけ加え
 女優もう架空の人になる涙
 片便へ極楽行きの不安あり
 お人好し架空のほろ口うかと乗り
 愛人を架空の人にしてみたい
 このへんは架空のままで読む伝記
 来て見ればそんな会社はビルにな
 フライシンジロドラマ次第に巻き込まれ
 童心の涙で読んだかぐや姫
 遺産株客ど架空の名が書かれ
 観光客お宮架空と思つてず
 夢架空潜在意識が組み立てる
 架空ではないと重備の要を説き
 俯向いて架空の事実肯定し
 子の知恵のなかに架空が持ち寄られ
 政治献金架空の人が影に居る
 春宵の夢桃源を馳けめぐり
 嘘でよし月には兎居てで欲し
 SFの作家の夢はコドモじみ
 蛸配当架空利益で社がつぶれ
 陰の母へおとこの心抱いて寝る
 宇宙船架空ではないテレビ見る
 孫悟空五色の雲を下駄にはき

柳白水双滋金潮痴柳章好章柳昭鉄古喜繁湖舟野白章
 太柳客楽雀よし三花亭太雅郎雅志三兄方仙郎平遊路柳雅

架空とは言わず歴史のひとにする
 架空ではなかったミイラ数珠を持ち
 工事場のやりくり架空の人造り
 妻にする言訳け架空の友が出来
 伝説が架空のままで伝えられ
 少年の恋は架空の美女なりき
 ニコンの夢は架空の処に置き
 赤坂へ架空の人が糸をひき
 年代を昔々の人が糸をひき
 使い込み埋める架空の領収書
 夢のかけ橋架空ではない青写真
 おれのこ書いたと架空人物おこられ
 架空から夢が生れて育てられ
 架空でもよし筋書きの面白さ
 架空にも科学のメスは容赦せず
 告白の中には架空の恋もあり
 街頭の署名は架空のことが足り
 聞き込みで出来た架空の人相書
 プライバシー作者は架空というけれど
 あれこれと架空名儀の金も出来
 金一封架空の名前の来た善意
 物の化へ光源氏の描き眉毛
 例えは話へむきになつてくる
 実在の人を架空の名で叩き

梅水古好一阿金弓多双醉凡静生清弓金昭多白清季天潮
 里客方扇茶三彦志楽升郎馬庵人彦三三志子人賛樹花

川柳塔社

常任理事会

第五回川柳塔社常任理事会が六
 月四日午後六時から本社楼上で開
 催された。

「路郎忌川柳大会」の成功は一つ
 に同人諸氏の肩にかかっている。
 なんといつても同人制度第一回の
 川柳大会である。出席諸氏の顔に
 は決意の色が力強く印象づけられ
 た。

十月の「創刊一周年記念」は、
 大会とせず、ただ記念句会として

開催してはどうかという声が強か
 った。

今月も増ページ論が出た。しか
 し正直いって、もうすこし購読者
 をふやしてからでないといふのであ
 るという慎重論が圧倒的だった。

同人諸氏に購読者をふやしてい
 たたく運動。こういう声もあった

が、すでに十名以上もふやしてく
 ださった方もある。とにかく同人
 諸氏に誌上からご協力を願うより
 方法がないようである。

出席 庸佑、生々庵、白柳、圭
 井堂、多久志、薫風、形水、好郎
 古方、栗、梅里、一三夫諸氏

閉会九時

各地樹壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

植込のゆれが教えたかくれんは、代役をこなした腕を見込まれるまきぞえに叱られてやるいい笑顔大和路へ時代は此処も排気ガスおちぶれて犬のまごころよく判り代役の変わった味へ拍手するスマートに仕立ててゐる無理を云いまきぞえの方が本気になる喧嘩代役で来てソファへは浅く掛けゆりかこの夢をいっしょやるママスマートな男へ段を耐えしのび株式にしてから店舗ゆれはじめスマートな店が這入りにくくスマートな男へ段を踏み違へ震度三マまでは咄嚙に子をかかえ忠犬も思春期らしくついて来ずめゆれていい心見えて膝すめり気がつけば代役同士丸うなり時代祭カメラへじゃまなヒルの空ランプから核の時代へ生き続け

千季一痴あ白吸金圭好柳古清凡文小恭滋水梅柳静
梢賛舟亭き柳江三堂郎志方人郎秋園太雀客里子馬

決意した筈に別の心が又も追いつちぐはぐな思いごとのある代役ご祝儀と酒手へ神輿派手に揺れ三味は買われ貧はほつとかれ夫の青春たけは埃出るばかりスマートにどこからか鳩出と見せ再会の恋に平和な家庭揺れ

玉造川柳会（大阪市）

プレハブの屋根へ直射の陽がまはり照りつける方へ氷屋敷を出し、あの顔で脚でダイを身にといい、宅地造り鯉館などに遠慮せずアルバムに我が人生の縮図見るもう逢わぬ人をアルバムから離すアルバムに我が僕かとあどけなすアルバムへもう貼り処なし宮詣りアルバムに半分だけの顔も居る添いとげた妻ぬるま湯の肌ざわり霜やけをぬるま湯へ日想いぬるま湯のまんま湯へ客を裸にしぬるま湯で落くのがこる粉ミルク人前は誇らしそうに辞めた僕誇り捨てた尼僧還俗すると決めた小企業にそっぽ東大出の誇りまがいもの売らぬと親鯉煙草吹く大安へ誇る荷物の中の処女誇り高き男財布を覗かさずのこれた誇りをけなしかみつゝ誇りなど持たぬ顔群衆となりぬ奥の手を出して誇りを傷つける誇らしく勝った事だけ云うカケ師

烏ヶ辻川柳会

寄席中継チャンネルいっも父がとり

凡弥生 八郎 集一 野菜 章雅 一榮報 柳宏子 柳太 照贊 季き 六電子 寿美司 義栄 文秋 井平 滋雀 三時 野菜 中性 句念坊 川柳堂 恭太 凡九舟 白柳 金三

大学は出たけど寄宿へはまだ通い
年寄りを連れて寄宿まで笑いに來
施設の子寄席でさびしげに忘れさせ
花見酒エレキもまじる賑やかさ
花見酒となりの三昧で贈す
しくじりが今日も尾を引く花見酒
花見酒のトラをもてあます
一升びん女は抱いて来る花見
酒ずきの幹事隣の花で酔い

大鉄川柳会

让白溪子報

山頂の空氣をひとり占めにする
海見える視界の中にガストク
新緑の雑木俄に持つ量感
ひと息をすけば腹減る子が揃ひ
再診の通知へ書きかな日々
久方天下の空氣ちたで吸ひ
反主に流下の空氣ちたで吸ひ
古都近く小鳥の聲の天王山
笛の子にピツタリと言う土を
展望へれらげ畠は探す道
孟宗に風あり天王山の道
塗壁の茶室生死を悟る処
みはるかすかすみの中男山
娘の仕草すばり亡妻思う夜
高速道路キラリと光りバス
一息に喋って言訳めいてくる
床の間を塞いで間借り本を積み

交通局句会（大阪市）児島

婚約が成立朝寝しておれず
並木道は線は引いて婚約者
今日から一線は引いておれず
婚約も知らずお熱いラブレッ
婚をしてから人生開けて来

翠茶利春 白 水 萬 杜 初 永 紅 求 季 賀 季 勢 た 一 尚 定 美
芳 坊 郎 果 子 客 的 的 甫 斷 月 女 贊 人 笑 火 門 し 高 山 子 穂
呂志報 漢子報 逸竹愛良草夏甘 沒食子
名莊論夫右生草

婚約が出来て仲人気がきかせ
婚約者来てアルバムを見て貰い
婚約のポーズ注文通り撮る
腕組んで婚約時代という歩巾
婚約がきまり肩の荷をおろし
未っ娘の婚約決りホッとし
婚約をしてから忙し日が続く
婚約は長し誤解も二つ三つ
サラリも水増し婚約まとめて来
婚約の朝をカメラに取りまかれ
婚約に破れて芸の鬼になり
婚約の日取りは田植えの手が揃い
波風を越えて二人の婚約し
一周忌迄と婚約待たされる
婚約に母の瞳に光るもの
婚約者以外の女目につかず
婚約の直後のデートは供を連れ
太陽の聲のたりない婚約日
婚約鯛ハイヤーに乗って来る
通帳はほめて仲人取りきめ
婚約はしたが団地は落選し
養子だと云わずに婚約だけを云い
棟梁が弟子に教わるメートル法
隣席から僕の視線を追う視線
旧友に逢えば旧友のことばかり
婚約の喜び八重歯まで笑い

国鉄川柳会(岡山県)浜田久米雄報

淡多舟 漫多亭 松亭 孤舟 季舟 秀峰 雅果 三十四 一乃流 清則 正太郎 市平 天万 鉄舟 我勝 凡樹 天歩 一歩 タロベ 一歩 ゴーゴ みのろ 洛醉 緑雨 与呂志 寛柳子 柳五郎 乃朋 宗義 敏治 佐加風 胡風 振り上げた拳が自重へ落けてゆき
臆病が自重をしたと褒められる
自重しておと思えば無一文
自重して良かった他人が言うて
自重した心につめた他人の目
自重した心桜でくずれたり
自重して後妻の若さ化粧する
自重せよとは見逃してくれるらし

性格が出て丁寧な走り書き
母にだけ別れの言葉走り書き
せつがちの貧乏ゆすり堂に入り
鍵っ子がさびと読んで走り書き
せつがちは来てすぐ帰る腰になり

ウィロー社(ハワイ)築山快夢起報

待遇をチップ次第で変える宿
待遇がどうあるうとも俺は俺
待遇もオートメ式に弾き出し
云いにくく待遇の値にふれる
待遇を云々囚人までがスト
待遇の改善叫ぶストライキ
魚心あつて待遇まで来
先生と云わすり待遇まで来
待遇はよいがサービススローモ
無いはずが茶代次第で上客間
広告の様に待遇してくれず
待遇に満足出来ぬ世の動き
待遇と別に社長の間魔顔
待遇は社長養子にしたい肚
待遇が又もやチップはずませ
待遇はよしホステスは美人です
生字引と云われ待遇だけは平
抵抗は待遇不満が座り込み

備前川柳社

横山一声報

給料日鈍子二本は黙認し
落書は隣りの餓鬼と黙認す
黙認をされて背中がこそばゆい
黙認の念押しているそれ道
三号が出来たを二号黙認し
酒の友妻黙認のまま迎え
黙認をするにはあまり大きすぎ
課長ともなれば見て見ぬを

文平 太郎 哲郎 久米雄 麗女 曉舟 雪円 雪女 麗子 雪女 エス子 魔花麗 柳葉 緑風 紅茶 内海 泉歩 紅里 浅溪 浅夢 快起 三石 静子 三子 寛子 怡子 一坊 伊久野 静月 芝月

本誌の投句には

なるべくご利用ください

川柳雑誌

柳

箋

一冊(五十枚) 三十円
送料 二十円

弱点を握られていて黙認し
上役の浮気黙認しておこう
黙認にも限度があった朝帰り
口論の末は父ちゃん黙認し
黙認へ何か言いたい唇を噛み
ふんい気のよさへ黙認すると決め
黙認へ歳暮がとどく台所
黙認の判を真直ぐついで呉れ
黙認をして居る酒をぐつと飲み
うぐいすの声聞く耳は持たぬ恋
山脈の魅力両親悲しませ
盃洗へ捨て返盃の義理があり
むらくも川柳会(島根県)藤井明朗報

週末はてんで舞の遊覧地
風邪気味の鈴へ気になる隙間風
強情と強情チャンネルよく廻り
半天の鈴一ぱいの天理教
半情が都市計画とおくらす気
農繁期週末などとおくらす気
聴診器ひらいた鈴へ無表情
半鈴をうれしく縫うて式近し
週末の机をまわる旅プラン
結婚をしてから強情ちらりみせ
白華 孝鶏 清昌 正芳 清一 明朗 夢声 華子 郎 泉 朗 明 朗

小野田川柳会

国弘半休報

友情の握手リングで打ち飛ばす
友情に引かれ弔辞の声ふるい
獄窓に友情を知る文がつき
茶転に友情が来て荷をまとめ
笑いたいにも笑われずつばをのみ
笑いたい記事の少ない世に呆れ
笑いたい夢でも見たかくわえ乳
笑いたいときに笑える子に育て
茶碗にもマンガ商魂たくまし
冷御飯もった茶碗は妻のもの
わが家の茶碗遠慮のないうまさ
陰膳の茶碗が割れた日の予感
古呆けて居ても茶碗にある気品
三味線が役にたたない唄となり

純 千 羊 笠 純
昌 保 舟 歳 つ とも
き 空 仙 道 花 弘 素 花
霞 六 草 弘 花 花 霞
すみ 花 花 花 花 霞

王手飛車かけて鼻唄とは憎い
鼻唄で妻の晴天よくわかり
下座から歌おうじゃなと手を叩く
高知川柳社(高知市) 川竹松風報
母の手を放す玩具の国があり
空からも南国博へ呼びに来る
郷土色豊か南国博開く
南国博ついでに同窓会もある
初かつを南国博の舌土産
南博へつづくバスから唄がもれ
銀婚の旅行は南国博へ来る
現実に戻りなさいと星が消え
転落の娘へ星が明るすぎ
星空の童話幼い日の記憶
桂 未 紅 柳 松 百 句 言 斐 彩
緑 遂 雨 翠 風 日 念 宏 山 泡
休 子 美

雅号ぶっちゃけばなし(18)

ごくらく



大森娛句楽

私の雅号歴は古く守本尊虚空蔵菩薩と
守護仏滝見観音に起因するもので幼少の頃
祖母に誘われ、自宅から五キロ程離れた所に三石の深
谷の滝があり、ここに滝見観音が祭祀されている。信仰
のため参詣した頃、溪流のせせらぎの雅び流れを祖母
と見ながら幼な心に俚謡を創ることを覚え、その俚謡
を号として山陽新報や萬朝報の文芸を主として、雅謡
壇に投稿していたのですが、昭和十三年萬朝報の廃刊
を境に、一時趣味も途絶えていたのですが初老頃から
川柳への趣味転向を契機として、守本尊虚空蔵を娛句
にもとり、余生を川柳一筋に楽しみを求め以て極楽へ
の道に通ずることを念願する意味から娛句楽と号し自
認している次第です。

路郎師句碑には自慢じゃないが

桜も散りますこの庵

閑居 娛句楽 明治壬寅歳生

雅流

郷愁をしみじみネオンの裏で
ふらふらと出て誘惑の夜のネオン
視察団ネオンの街も見て戻り
横文字のネオンも基地に近い街
ネオン塔の高さに用がなし
家出の娘あわれネオンに負けんとす

南海川柳会(大阪府) 辻

圭水報

這入るだけ今朝も押し込み発車させ
発車ベルもう弁当をひらく子等
煙吐いた頃がなつかしい列車発つ
発車する旅はたのしい紙コップ
田舎駅発車のおとを木の葉まう
発車してから二号はそばへ来る
発車もう重荷がとける妻を連れ
見送りの重荷がとける妻を連れ
発車ベル義理の見送りもう帰り
新婚をやつと二人にした発車
聞きわけて彼女来てない発車ベル
発車ベル女房だけは手を振らず

富柳会(青葉吟行)

阿部柳太報

気まぐれの散歩猫の子拾つてき
鼻先をこすり落語は喰うさしみ
気まぐれな暮しあさ寝の戸がしまり
刺身でもしよう妻の物憂い日
気まぐれが何やら浮々庭を掃く
母の日のみやげ以上にものて去に
ベトナム戦銃が重いとか叫ぶのだ
狸寝のつもりひるね寝てしま
父ちゃんは刺身子供はハンバーグ
気まぐれの筍床を突き上げる
電話口昼寝して居たらしい声
赤ちゃんの昼寝の汗をふいてやり

吉太郎 柳太 花梢 花み 美房 六竜 白柳 摩郎 吸江 青米 きは

風流がわかりもせず、雪見酒
新聞少年足跡残す雪の朝
ゴネ得の土地を継ぎつぎ新幹線
見合してとんぼ返りの新幹線
せめて客だけはとやりくり新幹線
雪病十年雪の曠野を行くことし
新幹線に乗ってきたこと云々
新幹線とんぼ返りも苦にならず
新幹線科学の粋も雨に負け
癒えぬ身の夢にも走る新幹線
年老いた母になじめる新幹線
空の事故新幹線の株上り
ふるさとをしのはす街の雪化粧
スキーヤー雪がとりも縁とやら
雪どけの軒にきこえる春の音
ゲレンデに新子の姿むつまじく
雪積り寝坊の子供床にいづく
今年よりちゃっかり型に転向し
両手出した口あける型にちゃっかりさ
雪どけのぬかるみよし村も春

岸和田うしお句会

(加仙報)

新品で通せば通るほどの傷
丸・四角・三角・妻のカレンダー
黒髪の長さも消えながら強くなり
カレンダーが気にならぬ職を持ち
大女優カレンダーガールからつきはじめ
お茶にごす言葉の裏は妥協せず
見がおせり女の喪服を着た女房
黒が似合って女の腹のたくみななり
日灼け甲斐あり契約がやとこれ
新品のレインコートで雨を待ち
黒いもの黒く塗らない絵が売れる
初夏の陽へふとんぐれただけふくれ
お茶ばかり日旺大工吞みたがり

若 功 白 史 静 マ 昭 寸 直 於 雪 芙 不 久 寿 好
茶 雄 扇 好 代 歩 己 千 貞 子 山 郎 美 郎
一 功 白 史 静 マ 昭 寸 直 於 雪 芙 不 久 寿 好
若 雄 扇 好 代 歩 己 千 貞 子 山 郎 美 郎
新品の箱を並べた開店日
兼題(新品・ふとん・黒・お茶・カレンダー)
あすなる川柳会(大阪府)
ベテランは髪一筋を決め手にし
手紙より先に帰ったアホらしさ
まだ値切る母を他人のように見る
良心があるかライイトに顔覆い
ライバルのライイトまだついてる入試
一致した意見もおや取りあわず
フィルムになにわの歴史組む予算
萬葉の不倫はさりげなく書かれ
一目をおいてるくせに白を持ち
明朗川柳会(大阪府) 田中
多幸報
梅素恵福百慶弓よし
里郎美子郎郎助彦
久生多源富柳清弘茶同濁喜歳
休子仏幸川士江坊生登水久美
芳子休幸川士江坊生登水久美
形水報

オースケ川柳会(大阪府)

形水報

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 03 5031・5032
南区墨屋町三ツ寺センター
TEL 03 9184

母の手紙故郷の匂いだよわせ
書いて読み読んで破るフレイター
良い便り出勤の足軽やかに
遊ぶ子の伸び行く姿母に書き
恩師からの手紙そのまゝ遺書となり
ウイドのストラックスの色に四季を知る
人よりも細く見せたいストラックス
ストラックスファスナーこれたも
股引のようなズボンでハイセンス
ストラックススタイルばかり気にかかり
寝敷したズボンの並ぶ通車
海の底行つてみたい竜宮城
海の上見えぬ境に四苦八苦
欲望が魚に及んで潜水艦
泳いでてビキニはすれて大あわて
夏休み海をうてと子がせがみ
今年こそ浮いてみたいと海に行き
海育ち海のこわさがよくわかり

常美忠一勝清東豊仙健有真智雄形順重博誠
夢路一扇美人勝 夢坊一人也元水造弘泉

煙水輪九

編集室の昼は電話と来客と通信文の返事や整理でてんやわんやである。一三夫さんや打ち合わせをしていても、三十分と話をしつつ時間がながい。雑用のあい間に仕事をしているようなものである。

本文を64ページにおさえているのでどうにもしようがない。鞍馬氏や大八氏、それに佐保蘭氏などの原稿を本号に発表できなかった。読者諸氏にもおわび申しあげる。そのほか同人諸氏の原稿も相当次号へまわった。申しわけない。ぼくのノートには各所の句会がギッシリ書いてあり月の半分は句会ばかりである。(清水白柳)

募集

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 松江梅里選
課題吟 (各題10句以内)

「優勢」 杉原愛鳩選
「肩」 木村水洞選
「茶の間」 大鶴喜由選
★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 松江梅里選
課題吟 (各題10句以内)

「手ぶら」 林野甦光選
「体験」 若林草右選
「垣」 国弘半休選
★川柳塔の投句は本社同人に限りません。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください

会社八月本

日時 八月五日 (金) 午後六時
会場 自安寺 (妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話 211・1478番)
兼題 柳 話
「パ」 「ン」
「手」 「チ」
「歴」 「が」
「史」 「かり」
席題 三題 (題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

電話 大阪 06 3985番

9月の兼題 「計算器」「欠点」
「ステレオ」「裏」

大井産業株式会社

本社 大阪市東区平野町四ノ七
電話 231-4888~9・8415番
東京出張所 東京都中央区日本橋橋町6番地
電話 661-6648番

・2 D K・

★六月号は奥付けをアタマに入れられたりサンザンだった。なかには思い切った組み方だね、なんておわれ冷や汗が出た。毎号、なにかがあつて申しわけない。
★六月二日、霞乃先生が本社へ「路郎百句」の写真を持つて来てくださった。
お疲れになつてはと思ひ生

お返りして、そのまゝ霞乃先生のお部屋で数日間、おじやまをしてしまつた。ここでもまたお写真を拝借することにしたが路郎先生の十七歳のときのお写真を発見した。これは珍しいものである。十七歳といへば、はじめて先生が川柳に手を染められた年である。

家にはつてこいの間どりで、怪しくもいふ所風で仕事をしてみたいと思つた。裏をあけると信貴山だそうだが、写真を拝見しながら仕事のことで風景をたのしむようになつた。
★まだまだ多くの珍しいお写真を拝借しているので来年の七月号を今からご期待ください。前号にも書いたように、「路郎百句」のベ

GOLDEN
O.S.K

の紳士服

スマートで
着心地のよい



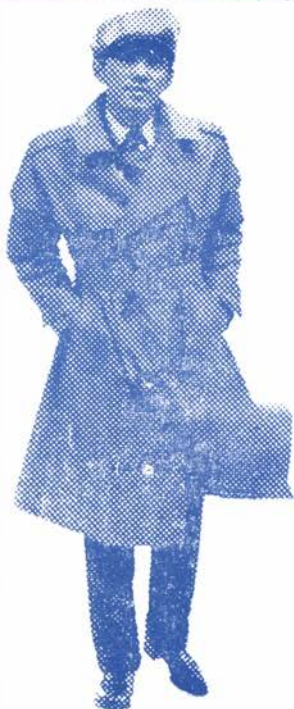
株式会社
オーエスケー



Toray

EASY CARE / 手のかからないせんい
東レイトン
レインコート

東洋レーヨン株式会社



★「路郎百句」のタイトルの文字は、封筒へ霞乃先生が書かれたものを、無断で出版にしたことをおことわり申しあげておく。それとも一つ、かなづかいが時代をあらわすため原句のままにした。
★また多くの原稿が次号へ回つたことをおわびいたします。
★仕事があつたので睡眠時間をとめるよりデがない。(不二田一三夫)

定価 百二十円(送料六円)

半年分 七百五十円(送料三円)

一年分 千四百四十円(送料六円)

昭和四十一年六月二十五日印刷
昭和四十一年七月一日発行

大阪府南区船場三番地

編集者 中島 達太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

大阪府南区船場三番地

川柳塔社

電話大阪・七二一 九八五番
柳井口・三三三 八八五番

軽快・新鮮です
クセがなく素直です
しかも優雅なコクがあります
サントリーは若人のビール、
あなたの若さへの賛歌です
声高らかに乾杯してください



青年のビール

サントリービール

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚饅 蓬菜 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー